

住宅クロスレビュー | 16 まちに開く

住人が調整できる「境界」を設けて
まちとの関係を見出すきっかけに

取材・文 | 松浦隆幸
写真 | 川辺明伸 (特記以外)

2人の建築家が、互いの設計した住宅を訪ね、共通するテーマで語り合う「住宅クロスレビュー」。

今回は「まちに開く」をテーマに、2件のリノベーション事例を取り上げる。

1件は、古谷俊一氏が設計した職住一体の賃貸住宅「大森ロッヂ新棟 笑門の家」。

もう1件は、常山未央氏の設計によるシェアハウス「不動前ハウス」。

双方に共通するのは、周辺のまちを含めた現況を入念に観察したうえで、パブリックとプライベートとの関係を、

さまざまなレベルで住人が調整できる「境界」のあり方を自然体で探った点にある。

なお、常山氏は現在、スイス・ローザンヌを拠点に活動しているため、

当欄では初めて国境を越えたオンライン形式で対談の場を設けた。

古谷俊一 「大森ロッヂ新棟 笑門の家」 2022年



ふるや・しゅんいち 1974年東京都生まれ。2000年早稲田大学大学院石山修武研究室修了。IDÉE、UDSを経て2009年古谷デザイン建築設計事務所設立。京都芸術大学客員教授。『みどりの空間学』(学芸出版社、2022)出版を機にみどりの空間工作所設立。主な作品に「深大寺ガーデン」(2018、日本空間デザイン賞大賞)、「スイシャハウス・スイシャオフィス」(2021、建築作品賞優秀賞)、「黒龍酒造ESHIKOTO PROJECT」(2022)「たがやすいえ」(2022)がある。

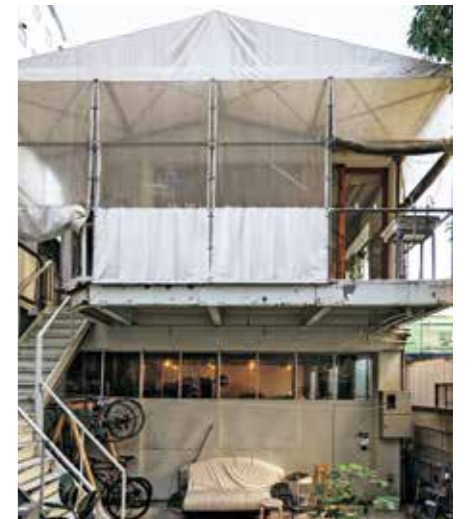


大森ロッヂ新棟 笑門の家のインナーガーデンから南側道路を見る

常山未央 「不動前ハウス」 2013年



不動前ハウスのリビングから、鉄扉に設けられたドアを介して表の路地を見る



つねやま・みお 1983年神奈川県生まれ。2005年東京理科大学工学部第二部建築学科卒業後、ブノート・ザバターアーキテクト(スイス)勤務。2008年スイス連邦工科大学ローザンヌ校(EPFL)建築学科修士課程修了。HHFアーキテクト(スイス)を経て、2012年mnm設立。2020-2021年東京理科大学特別講師、現在EPFL客員教授。主な作品に「不動前ハウス」(2013、2015年住宅建築賞ほか)、「西大井のあな」(工事進行中、能作文徳との共作、SDレビュー2017)がある。

大森ロツヂ新棟笑門の家

古谷俊一



ガラスを透かして既存の躯体が見えるファサード。T字路の角に面した東南角を、農業用温室のガラスで包んでいる



上 インナーガーデンからガラスのサッシを介して東側の路地を見る。駐車スペースを兼ねる前庭には、既存のザクロの木をはじめ、まちを彩る緑がしつらえられている
下 2階南側の部屋にある既存サッシを通してインナーガーデンを見渡す。以前、下屋があったことを暗示する垂木が架かる

昭和の木造躯体を ガラスで包み まちとつながる 職住一体の賃貸に

東京・大田区で、2009年から順次、古い木造住宅を改修してきた「大森ロッヂ」に、新たに「笑門の家」が加わった。9棟が肩を寄せ合う大森ロッヂの入り口ともいえるT字路の角地に立つ。2階建ての一軒家を全面改修して、角地に顔を向けたガラス張りの「インナーガーデン」を設けた。さらに、古い塀を取り払い、小さいながらも草木の緑が映える前庭をしつらえて、まちとの関係が芽生える賃貸に再生した。庭にあったザクロの木が鈴なりの実をつけたのを機に住民らが集うなど、地域に開かれた場として定着しつつある。

——大森ロッヂは、京急本線の大森町駅から歩いてすぐの便利な立地にあります。今回は

「まちに開く」がテーマでもあるので、せっかくだから駅前から現地まで古谷さんに案内してもらいましょう。

古谷 では、大森町の駅前から出発しましょう。ご覧の通り、この辺りは中小の住宅や店舗の密集地です。

常山 京急線沿いは下町っぽい雰囲気がいいですよ。

古谷 実は、僕も大森ロッヂの隣に自宅を建てて2019年からこのまちで暮らしているのですが、とても暮らしやすく便利です。

そう言っている間にもうすぐ到着です。この角を左に曲がって……見えてきました。小さなT字路の角に大きな木が立っているガラス張りの建物が「大森ロッヂ新棟 笑門の家」です。1961年に建てられた木造住宅を全面的に改修したものです。

ちなみに、このT字路の路地を入った突き当りに、2009年から順次リノベーションしてきた大森ロッヂの建築群があります。笑門の家はそ

こから数十メートル離れていますが、大森ロッヂの入り口に位置する建物です。

常山 笑門の家も、これまでの大森ロッヂの建物と同じクライアントですか。

古谷 同じオーナーの建物です。今回は延べ面積が100㎡ほどある一軒家で、職住一体の賃貸にリノベーションしたいというオーダーでした。

建物は2階建てですが、以前はT字路に近い南側に下屋が張り出していて、その屋根にアルミの物干し台が載っていました。改修では、下屋の屋根と物干し台、さらに内外装も取り払って木造躯体だけを残し、外側からガラスのファサードで包みました。T字路に面した東南角を、ガラス張りの土間空間「インナーガーデン」とし、その奥に連続する畳の間「ミセ」とともに、住む人に応じた多様なまちとの関係性を創出できるようにしています。

インナーガーデンを介して 緩やかに連なる緩衝空間

常山 ガラスの吹き抜け空間に、古い垂木が残っているのがいいですね。昔はここに屋根があったことを暗示しているみたいで。

古谷 柱や梁などの既存躯体は基本的に残しましたが、既存の垂木は傷みが目立ったの

でつくり直しました。この垂木は、単なる意匠ではなく、夏の直射日光を遮るためにヨシズなどを掛けたい住人もいるだろうと思って設けたものです。ガラスのファサードで包んだのは、午前の太陽を受ける東南向きだけで、南西側は壁にして西日を避けるほか、その壁を耐力壁にして構造を補強しています。

常山 ガラス張りのファサードはどんなサッシを使っているのですか。

古谷 農業用温室のサッシです。気密は取れませんが、サッシの割付けが住宅のスケールとも合いやすく、意外にコストパフォーマンスもいい製品です。温室のサッシなので電動で操作する跳ね上げ式の換気窓も製品化されていて、ここでも使いました。

ただし、防火サッシではないので、建築基準法の延焼ライン（延焼のおそれのある部分）に掛からないように、道路中心線や隣地境界線から3m以上離れた位置に、ガラスのファサードを設定しました。高さは2階に近いのですが、設計上は吹き抜けがある1階としました。というのは、2階にすると延焼ラインが5mになり、この位置にこのガラスのファサードを設けるのが難しくなるからです。

インナーガーデンは、小さな庭を挟んで地続きでまちとつながった土間空間です。庭にあるザクロの木は以前からあったものですが、塀を撤去して“開放”してあげたらにわかになんか元気になって、たくさんの実を付けるようになりました。一方、インナーガーデンの奥に続くミセは、住む人によってさまざまな使い方ができる空間であることに加え、さらに奥にある住居部分へとつながる緩やかなバッファゾーンでもあります。

では、靴を脱いでさらに奥の部屋にご案内しましょう。

まちと建築をつなぐ境界の 小さな前庭に大きな意味

古谷 建物の北側にあたる奥は、基本的にはプライベートな空間で、キッチン・ダイニングのほか、トイレや浴室などの水まわりを集約しています。床はすべて張り直して構造用合板で構面を固めました。今回のリノベーションでは、できる範囲で建物全体の断熱性能の向上と耐震補強を施しました。

2階には2つの部屋があり、南側の部屋は既存のサッシを介してインナーガーデンの吹き抜けとつながり、さらに外のザクロの木やまちも望

めます。2階の部屋も、屋根の断熱化などの手を入れた一方、既存の柱梁や小屋組みは現しで、古い欄間や戸棚を再利用しています。
常山 全体にパブリックとプライベートが上手に調整されている印象を受けました。1階の奥にあるダイニングにいても、まちに開かれたインナーガーデンの気配が伝わってきそうですね。まちとの関係性も、単に建物を物理的に開くのではなく、まちと建物の間にある小さな庭の草木や土を取り込みながら構築していること

に共感を覚えました。実は、この次に見ていた「不動前ハウス」も、既存の小さな庭の緑を活かしたいと思って手掛けたリノベーションプロジェクトなんです。

古谷 そう言っていただけるとうれしいですね。「不動前ハウス」の見学も楽しみにしています。



4



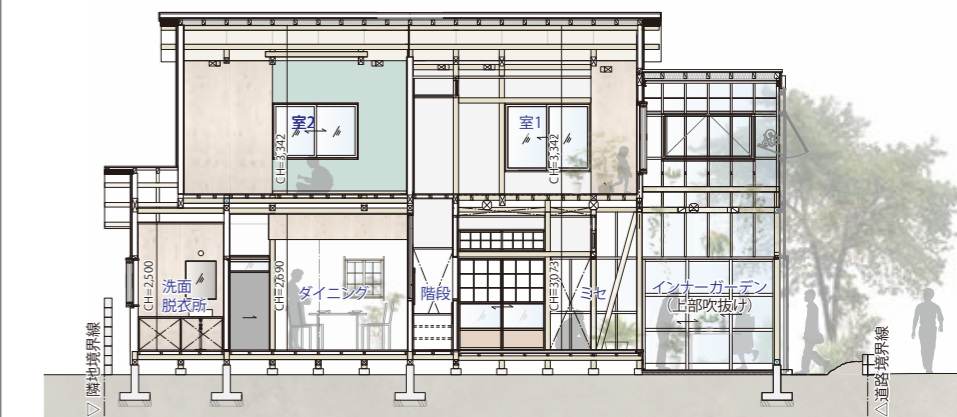
5



配置図兼1階平面図



2階平面図



断面図 S=1:150

既存躯体が透けて見えるガラス張りの 「インナーガーデン」を介して住人の暮らしや仕事が まちとの関係を創出できるようにした——古谷



1



2



3

大森ロッヂ新棟 笑門の家
所在地 | 東京都大田区
設計 | 古谷デザイン建築設計事務所
構造アドバイス | KAP
施工 | 日越
構造 | 木造在来軸組工法
階数 | 地上2階
敷地面積 | 102.14㎡
建築面積 | 60.86㎡
延床面積 | 98.12㎡
完成 | 2022年3月

- 1 インナーガーデンから連続して小上がりのような畳の間「ミセ」がある
- 2 インナーガーデンやミセでは、改修前の床の間や欄間などを再利用している
- 3 1階の奥にあるダイニングから見る。写真中央の左側、四角いガラスの開口部は、改修前に玄関があった場所
- 4 南側の全景。右手の路地の奥に9棟からなる大森ロッヂがある
- 5 設計者の古谷氏は、初期から大森ロッヂのプロジェクトに参画。大森ロッヂで唯一新築の「運ぶ家」(2015)を設計。2019年には、路地を挟んで運ぶ家と対をなす新築の自邸「インターバルハウス」を完成させた

不動前ハウス

常山未央



前庭の外階段を上った2階は、既存のバルコニーを利用したエントランス空間。バルコニーに開閉式のテント幕を張り、プライバシーの度合いを調整できるようにした



2階南西側の廊下に残したサッシの並びは、以前の住居のプランを連想させる

既存を逆手に取った緩衝帯で まちから個室までの関係を 自在に調整

築37年の2階建ての建物をシェアハウスに改修した「不動前ハウス」は、今年で竣工から10年を数える。建物は、1階が鉄骨造、2階が木造の混構造。1階に大きな共有リビングと2つの個室、2階に5つの個室という構成はいまも変わらず、住人が入れ替わりつつ現在も満室の状態が続く。不動前ハウスの特徴の1つは、性格の異なる空間をつなげたり閉じたりすることで、パブリックとプライベートの関係をさまざまなレベルで微妙に調整できる点にある。特徴的なプランは、既存の建物の状況に素直に反応した設計から生まれたという。

——日を替えて、今日は東京・品川区のシェアハウス「不動前ハウス」に来ました。細い路地に面した風情は一見、下町ようですが、あたりを見まわすと、四方をぐるりと中高層のビルやマンションに取り囲まれた都会の谷間のような立地です。古い2階建てをシェアハウスにする設計で、どのようなことを考えたのか、その後どのように使われてきたのか。建物を見学しながら、スイスにいる常山さんに遠隔で案内してもらいましょう。

常山 このプロジェクトは、オーナーでもあるク

ライアントが、私に相談をもちかけてきたところから始まりました。クライアントは、自らの住まいに加え、将来の投資も視野に入れつつ、生活の基盤となる不動産を購入しようと考えて、この土地と建物の購入を検討していました。2013年にシェアハウスにリノベーションした時点で、築37年でした。

建物は2階建てで、1階が鉄骨造、2階が木造です。建設当時は1階が倉庫、2階が住居だったようです。クライアントが購入したときは数年間空き家でしたが、その前は1階が住居に改修されていて、上下に2世帯が暮らしていたようです。

古い壁から出現した鉄扉を使い 内外に伸縮するリビング空間

古谷 クライアントは、シェアハウスにリノベーションする前提で購入したのですか。

常山 リビングを共有するシェアハウスというアイデアは当初からありました。ただ、予算が厳しくて悩みました。当時、私は“断熱大国”のスイスから帰国したばかりだったこともあり、改修するならきちんと断熱化して、建物のクオリティを上げたいと思ったのですが、予算に余裕がありませんでした。

その悩みを解決してくれたのは意外な発見でした。いまも残っている、建物正面の幅いっぱい

の4枚の鉄扉です。改修に当たって1階の住居を解体したら壁の中から出てきたんです。つまり、建設当時の倉庫の鉄扉を残したまま、その上から壁を張って住居に改修していたようなのです。

この鉄扉はそのまま活かしたい、でもそうすると鉄骨造の1階を断熱化するのは難しい。ならば、まずは現状を受け入れて予算に納まる改修をして、1階の断熱化はいずれ資金ができたときに再検討してもよいのではないかと——。鉄扉という“宝物”を発見したことで、いい意味で開き直ることができ、建物の現状を素直に打ち返す設計プロセスを取ることにしました。結果として、木造の2階は一定の断熱性能を確保しましたが、1階は非断熱のままです。いまでも、このプロジェクトは、既存からの「いただきもの」でつくったものだと思っています。**古谷** 残した4枚の鉄扉が、1階の共有リビングのあり方や、まちとの関係性にもつながっていくわけですね。

常山 かつて倉庫だった高い天井も活かして、共有リビングは大きながらんだりの空間にしました。鉄扉を開ければ小さな前庭や前面の路地まで連続した開放的な広い空間になります。一方、鉄扉と平行する2枚のカーテンを設け、3つのスペースに仕切って使えるようにしました。

鉄扉を見ていただくと、上部に透明の亚克力板が入っているのがわかりますか？ あれは改修前、白い亚克力板だったのを透明に変更し



4



5

プライバシーを保ちながら開けるように 境界部の調整を意識して設計を進めた——常山

て、鉄扉を閉めていても内外の連続性が感じられるようにしたものです。同じ発想で、内部に設けたカーテンも上部を透かして、すべてのレイヤーを閉じたときでも外部から内部までの空間全体が緩やかにつながるようにしました。

実際の使われ方も、鉄扉を開けて内外をつなげてDIYをしたり、一番奥のカーテンだけを引いてヨガ教室を開いたりするなど、使い方に応じてスペースを伸縮しています。いま、共有リビングにあるミラーボールや照明器具も、住人がDIYでつくったものなんです。

では、いったん前庭に出て外階段を上がって2階に行ってみましょう。

建物の外周を回遊する廊下は 縁側のようなコモンスペース

常山 2階は、建物の外周に沿ってぐるりと回遊できる廊下を巡らせ、その内側に5つの個室を配置しました。一般的な考え方としては、たとえば中廊下式にして個室を並べるプランなどありますが、ここでは廊下を外周に回遊させるプランにしました。

このプランの大きなメリットは、予算との兼ね合いで再利用した既存の開開口部の位置にとられることなく個室を配置できた点です。また、開口部が続く廊下には縁側に似た雰囲気があって、1階の共有リビングとは違う形で、住人同士が短くコミュニケーションを取れるコモンスペースになりました。

廊下に面した個室の出入り口はガラスの木製建具にして、カーテンも取り付けました。どの部屋にも廊下を介して自然光を取り入れることができ、ガラスとカーテンという2枚のレイヤーを操作することで、光や音、視線などをそれぞれの状況に応じて調整できます。

古谷 さきほどから見ていて、このシェアハウスにはどこか日本人的な感覚とは違う何かを感じています。たとえば、この廊下は、単なる動線ではない。欧州に行くと、こういう建築をよく見かけますが、日本人はここまでプライベートな空間をオープンにしませんよね。

常山 確かに、欧州の人たちは、少しくらい外から見られてもあまり気にしない人が多いですよ。日本人のほうが、プライベートな空間を外に開くことに抵抗感を抱く傾向が強いと思います。せつかく透明のガラスを入れても、カーテンが閉めっ放しになったりするし……。

そうしたことも含めて、このプロジェクトでは境界部をうまく調整して、プライバシーを保ちながら開けるようにすることを意識して設計を進めました。

緩やかな「境界」の連なりを 自然体でつくる感性が大切

——今回のテーマ「まちに開く」を考えると、いま、常山さんが口にした「境界」がキーワードのひとつになりそうですね。

古谷 たとえば、不動前ハウスの1階の鉄扉は、単なる内外を隔てる境界ではないですよ。この建物の入り口は、すでに路地から始まっていて、そこから個室までの間に連なるさまざまなレベルのバッファゾーンの関係を、微妙な開閉で調整できる1枚の間仕切りのように感じられます。

僕が設計した笑門の家は透明ガラスで包みましたが、それはあの立地をはじめとするさまざまな状況や条件をトータルに判断して選んだもので、まちに開くために透明にしたわけではありません。言い方を変えれば、透明にすればまちに開かれるわけではないわけです。

常山 笑門の家にあるガラス張りのインナーガーデンは、不動前ハウスの2階バルコニーにあるテントの感覚に近いと思います。パブリックとプライベートの境界に“懐”となる空間を挟んで、間接的に開いたり閉じたりしやすくしています。つまり、境界の設計で大切なのは、個々のプロジェクトで適材適所の方法を見出すことだと思います。

古谷 建築の世界で「まちに開く」というと、とかく「コミュニティが希薄だから建築を開こう」といった話になりがちですが、僕はそんなに肩ひじを張っていません。むしろ、肩の力を抜いて、自分たちがこのまちで暮らしやすいと思う建築を自然体でつくっている感覚です。同じような自然体の感覚を、不動前ハウスにも感じました。いくら、建築家が「建築を開く」と説いて、コミュニティが形成される仕掛けをつくり込んでも、実際にそこで暮らす人たちのマインドがついてこなかったら開かれないですから。

常山 物理的に透明だとか、開閉できるということと、まちに開かれるかどうかは少し別の話ですよ。建築というのは、そこで暮らす人たちの背中をまちに向けてそっと押してあげられるような背景でいいのだと思います。

松浦隆幸 まつうら・たかゆき
編集者、ライター／1966年東京都生まれ。1990年東京理科大学工学部建築学科卒業後、日経BP社入社（日経アーキテクチャ記者）。1994年退社。農業生活などを経て、2005年に編集事務所オン・ザ・ロードを設立し、現在に至る。



6



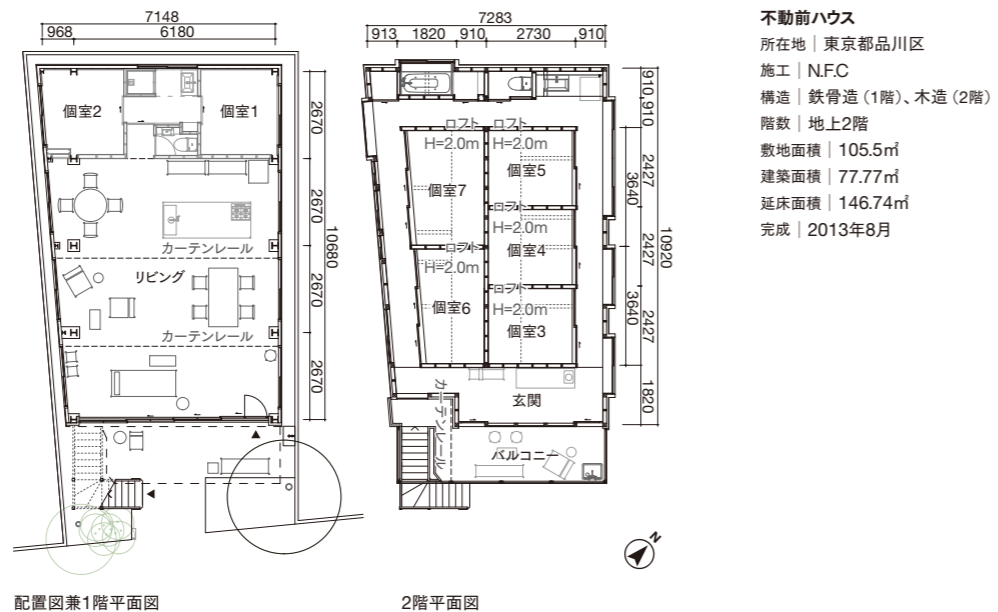
1



2



3



- 水路にフタをした暗渠の路地に面して立つ
- 1階の共有リビングは下足履きの土間空間。写真右側の白い壁の向こうに2つの個室がある
- 1階の共有リビングには、その時々住人がDIYでつくった家具などが並ぶ
- 2階には、建物の外周を回遊する廊下が巡る。写真は、個室から北東側の廊下を見たところ。腰掛けにもなる既存の出窓が並ぶ廊下は、縁側にも似た雰囲気がある
- 現在、常山氏はスイス・ローザンヌで暮らしているため、オンラインでの対談となった
- 2階の個室は、ロフト付きの屋根なりの小空間。部屋同士の間仕切りは耐力壁を兼ねる。木造の2階は構造補強や断熱化を施した



宮本忠長による北齋館（竣工時）のスケッチ
[提供：宮本忠長建築設計事務所]

建築家の〈遺作〉| 13 宮本忠長「北齋館(第3期)」

談 | 宮本仁夫・西澤広智・松橋寿明（宮本忠長建築設計事務所）

取材・文 | 磯達雄

修景をライフワークとして

長野県の設計事務所で、地域に根差した建築づくりを続けた建築家。その代表作としてしばしば挙げられるのが、小布施町並修景計画だ。小さなまちに美しいタウンエリアを整えた手法は、まちづくりの手本ともされた。その計画の始まりとなった北齋館の改修に、宮本は亡くなる直前までかかわったという。実弟で宮本忠長建築設計事務所会長の宮本仁夫氏、小布施の計画に長くかかわった西澤広智氏、北齋館（第3期）を担当した松橋寿明氏に話を聞いた。



宮本忠長 みやもと・ただなが
建築家(1927-2016)／主な作品に「長野市庁舎」(1965)、「長野市立博物館」(1981)、「森鷗外記念館」(1995)、「松本市美術館」(2002)や、「小布施町並修景計画」(1976-)がある。[提供：宮本忠長建築設計事務所]

「間」の空間を丁寧につくる

宮本 遺作といえるのは、やはり、北齋館ではないかと思います。この建物は1976（昭和51）年に竣工しましたが、1990-1991（平成2-3）年の第2期、2013-2015（平成25-27）年の第3期と、2度にわたって増改築が行われ、そのいずれも我々の事務所が設計を担当しました。そして第3期が竣工した翌年に、所長の宮本忠長は亡くなりました。

松橋 第3期の設計は、1976年の竣工時からずっと北齋館に、そして小布施にかかわってきた宮本所長にとって、集大成ともいえる増改築設計でしたから、これを西澤と私で担当させていただいたのは非常に光栄なことであると同時に、身の引き締まる思いでした。この事務所に入社して以来、宮本所長から聞かされ続けてきた小布施のまちづくりの手法をしっかりと受け

継いでいかないといけないし、これからの小布施で何が求められているのかも、設計者として応えていかなければならない。大変責任の重い仕事であったと、いまでも思います。

宮本 北齋館は浮世絵師・葛飾北齋（1760-1849）の美術館です。小布施は北齋が晩年、地元の豪農・高井鴻山（1806-1883）に招かれた地で、最晩年の肉筆画はほとんどここで描かれました。まちに残るそれらの作品をしっかりと保管する収蔵庫をつくらう、というのが北齋館建設の最初の目的でした。当時はまだ、小さな町が美術館を建てた事例はほとんどない時代でした。しかし当時の市村郁夫町長は「小布施の先代住民たちが大事に保管してきた北齋画を、しっかりと孫の代まで引き継いでいくために」と考え、建設を推し進めたという経緯があります。開館して45年がたったいま、北齋館は小

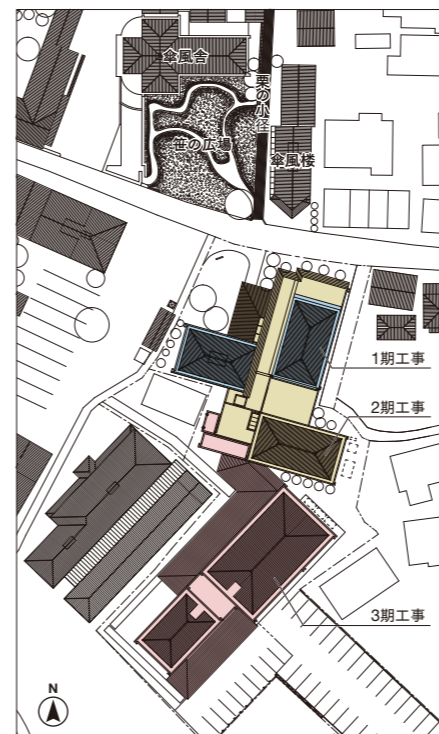
布施のシンボリックな施設として、人々に親しまれています。

西澤 この建物が雑誌『建築文化』（彰国社、1977年7月号）に掲載された際には、「田んぼの中の小さな美術館」という見出しが付いていました。いまでは多くの観光客でにぎわう小布施も、当時は田んぼ以外何もないような場所だったのです。その一方で、北齋作品への注目が高まっていた時期だったこともあって、竣工時はわずかな展示スペースしか構えていなかった北齋館を、たくさんの来場者が訪れるようになりました。すると、徐々に小布施のまちにある店舗が、来訪者をもてなそうと自分たちの建物をきれいにしはじめて、そこからまち全体を整えていこうという機運が高まったのです。

松橋 宮本所長が第3期の設計で一番こだわりのもっていたのは、展示スペースの最初に配されているガラス張りのギャラリー空間です。ガラス

- 1 北齋館外観
 - 2 ギャラリーから軒先の方向を見る
- [写真1-2提供：宮本忠長建築設計事務所]

北齋館
所在地 | 長野県上高井郡小布施町
設計 | 宮本忠長建築設計事務所
構造 | 鉄筋コンクリート造
延床面積 | 1,438.2㎡
階数 | 地上2階
竣工 | 1976年（新築／1期）、1991年（増改築／2期）、2015年（増改築／3期）



北齋館3期完成後 配置図
[提供：宮本忠長建築設計事務所]



1



2



1

越しに緑で囲まれた空間を、室内にいながらもまちの空気が感じられる場所としてつくるべきだと。日頃から宮本所長は、「公益性」や「間のデザイン」という言葉をよく口にされていました。それぞれの建物が公益性の観点を持ち、建物と建物の間に挟まれた「間」の空間を丁寧にじっくりつくっていくこと。これは、小布施の町並修景事業で常に目指されていたことです。北斎館のガラス張りのギャラリー空間にも、その意識が強く表れています。

最晩年の宮本所長は、身体の状態から、東京の大泉にある住まいにいたきりになっていました。我々は模型やスケッチや図面を持って何度も足を運び、第3期設計に関する打ち合わせをして、宮本所長がもっているイメージや考えをどういうふうに見具化するかを最後まで擦り合わせていきました。事務所40年以上取り組んできた計画なので、スタッフ間でもおおよその設計方針は共有できており、宮本所長から大きく変更の指摘を受けることはあまりなかったと記憶しています。竣工時には、写真や動画で完成した建築を見ていただきましたが、現地へ足を運んでいただけなかったことは心残りです。

東京と長野を行き来する生活

西澤 先に触れた通り、北斎館がきっかけとなって、小布施の町並修景事業が始まりました。北斎館や高井鴻山記念館があるまちの中心エリアを、地権者である住宅2軒、老舗菓子店、信用金庫、まちが互いに協力し合いながら整備を

進めたのです。これに宮本忠長建築設計事務所が全面的にかかわりました。

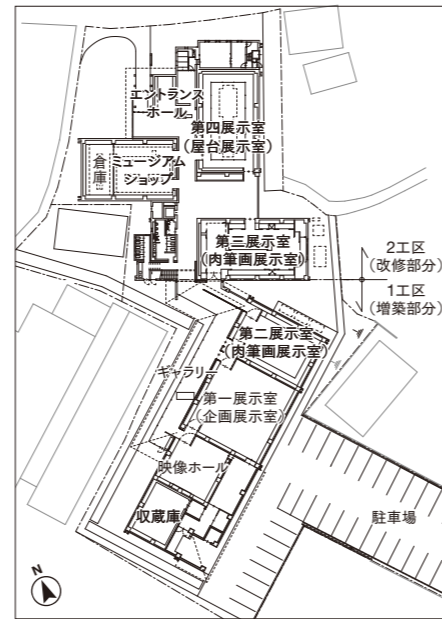
宮本 この仕事について、所長は「修景」という言葉を使っています。この計画がスタートした時代は、まちづくりに景観という言葉はまだ使われていない時代でした。そういう意味で日本で一番先駆的な計画だったのではないかと思います。吉田五十八賞を受賞した際も、その点を審査委員長である村松貞次郎先生（1924-1997）に評価していただきました。

そもそも小布施にかかわるきっかけとなったのは、1965-1968（昭和40-43）年に建てられた「栗ガ丘小学校」です。このときに初めて小布施の建築を設計し、当時の町長である市村郁夫さんの信頼を得たのです。「栗ガ丘小学校」は、2つの小学校を統合して新しい小学校をつくるという計画でした。施主の市村町長は「形あるものはすべて活かそう」という考え方をもっていて、その要望に所長はすべて応えていました。統合により不要になった木造校舎の部材を使って、別の施設をつくったりしたのです。そのときに木造建築を解体し移築するノウハウを培ったことが、北斎館の建設以降に始まる小布施の修景計画にもつながったといえます。

西澤 宮本所長自身も、「栗ガ丘小学校での経験があったからこそ、小布施で古いものを活かすという思想につながった」と文章に書き残しています。

宮本 ですから、小布施では「保存・再生」という意識はあまりないのです。

松橋 地域のことを、ただそのまま残すような設



北斎館1階平面図 S=1:1,300 [提供：宮本忠長建築設計事務所]

計ではありません。その地域のいいところを、現代的な言葉に置き換えて、誰もが納得して受け入れられるような提案をされていました。こういう設計思想は、宮本所長が東京と長野を行き来する生活を40年以上も継続してやってきたことに起因すると踏んでいます。まだ新幹線も通っていない時代から、片道3時間かかる移動を、多い時には週に3回ほどしていた。インターネットがない時代に、日本の中心で起きている建築界の動きと、地方で起きている建築界の動きには、ものすごく大きな情報の格差があって、そのどちらにも身を置きつづけることで、東京と地方のいいところを折り合いをつけながら調和していく設計手法を身につけることができたのではないかと思います。それが小布施でのまちづくりにも表れているのだと思います。

マスタープランのないまちづくり

西澤 小布施のまちづくりは、これまでの住環境をリセットしてしまふ再開発ではなく、住民が住みつづけてながら少しずつ住環境を整備していく、いわばマスタープランのないまちづくりです。関係者が多い分、それぞれの交渉や一軒一軒との契約が必要で、非常に骨の折れるプロジェクトではありましたが、この修景事業は宮本忠長所長にとってライフワークとして取り組まれるものになっていました。小布施には宮本所長が委員長を務めていた建築デザイン委員会という組織があるのですが、これにはいまでもうちの事務所から所員が、2カ月に一度、建築相談に



2

行っています。これも、宮本忠長が小布施のタウンアーキテクトとして、これまで築いてきた関係があってこそです。

松橋 北斎館の第3期が竣工したあと、現地の写真とともに小布施のまち並み全体をドローンで撮影した映像を宮本所長に見ていただきました。所長は大変に喜ばれていて、飽きずに何度も何



3

度も、ご覧になったそうです。1970年代から自らの人生を懸けて手がけてきたまちづくりの成果を、建築家としての自分の軌跡を重ね合わせながら、見ていただけたのかなと思っています。北斎館の第3期が、そうした所長の気持ちに応えることができていたとするなら、建築を設計する者としてこれ以上ない生き甲斐と喜びを感じます。



4

取材協力：篠田 諭（宮本忠長建築設計事務所 専務取締役 管理部長）

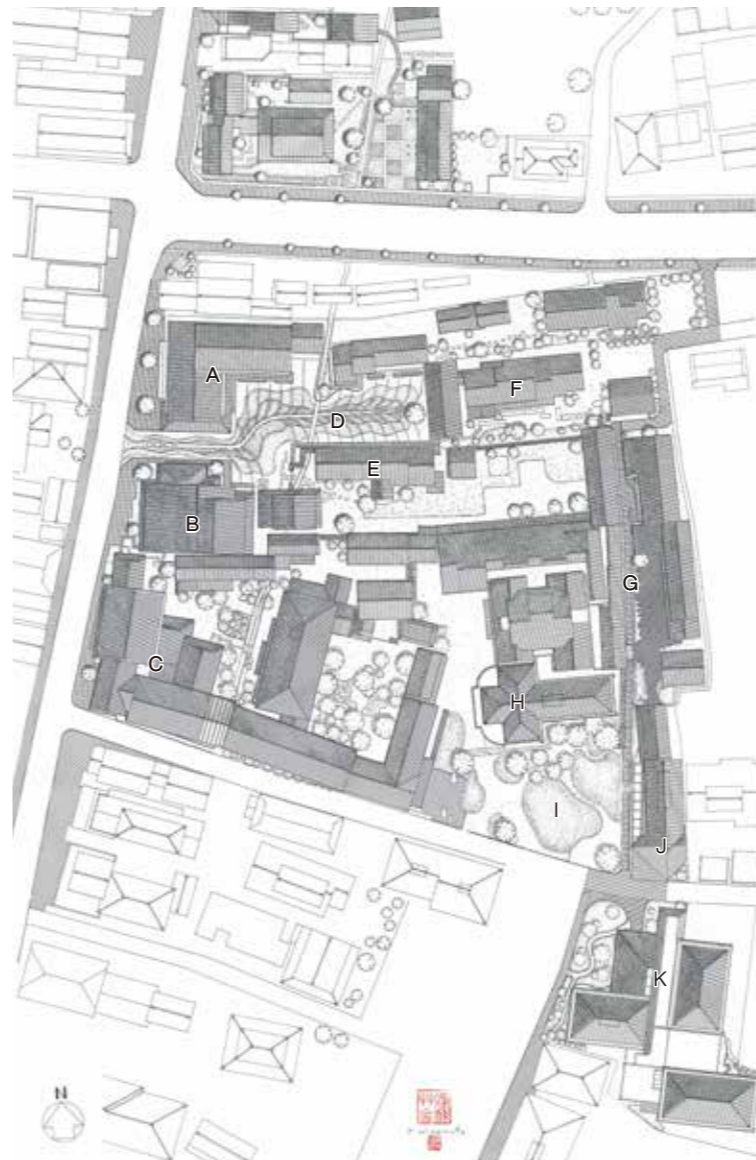
宮本仁夫 みやもと・まさお
宮本忠長建築設計事務所 代表取締役会長 / 1940年長野県須坂市生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業後、1965年に宮本忠長建築設計事務所に入社。2010年に代表取締役所長、2020年からは代表取締役会長に就任し、現在に至る。

西澤広智 にしざわ・ひろとし
宮本忠長建築設計事務所 設計長 / 1954年長野県長野市生まれ。日本大学理工学部建築学科卒業後、1979年に宮本忠長建築設計事務所に入社。主な担当作品に、小布施町並修景計画（1982-1987年）、小布施町第2町並修景計画（2009-2011年）がある。

松橋寿明 まつはし・としあき
宮本忠長建築設計事務所 設計長 / 1971年長野県長野市生まれ。日本大学卒業後、東京大学生産技術研究所藤森照信研究室に研究生として所属。1994年に宮本忠長建築設計事務所に入社。主な担当作品に、北斎館3期（2015年）、小林古径記念美術館（2020年）がある。

磯達雄 いそ・たつお
建築ジャーナリスト / 1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988-1999年日経アーキテクチャ編集部勤務。2002年-2020年3月ブリックスタジオ共同主宰。2020年4月よりOffice Bungaを共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

- 1 ギャラリーに隣接する軒下空間
 - 2 宮本忠長建築設計事務所設計「長野信用金庫小布施支店」(1986年)
- [写真1-2提供：宮本忠長建築設計事務所]
- 3 栗の小径
 - 4 風の広場
- [写真3-4：浅川 敏]



小布施町並修景計画 配置図 [提供：宮本忠長建築設計事務所]

- A：長野信用金庫 小布施支店
- B：小布施堂 本店
- C：樹一市村酒造場
- D：風の広場
- E：高井鴻山記念館
- F：和菓子 いちむら
- G：栗の小径
- H：小布施堂菓子工場 傘風舎
- I：笹の広場
- J：小布施堂 傘風楼
- K：北斎館



宮本忠長による小布施堂本店のスケッチ [提供：宮本忠長建築設計事務所]

新世代・事務所訪問 | 16 伊藤 維

ナビゲーター | 門脇耕三 (明治大学准教授)

次世代のプロジェクトが胎動する、建築家のワークスペースを訪問するシリーズ。そこで展開している活動の、あるいは生き方の独自のスタンスに触れながら、新しい建築の姿を捉えていく。

人やモノ、場所を自在に編み 地方と世界を接続する

いつも笑顔で、物腰もやわらかく、人好きのする伊藤^{たもつ}維は、実はとてもしたたかな建築家ではないかと思う。大学を卒業後、アトリエ事務所に勤務して実務能力を養ったうえでアメリカの大学院に入学。その後はスイスで大学教育に携わり、アカデミックかつグローバルな視点と人脈を獲得。輝かしいキャリアである。しかし、そんな伊藤が可能性を見出したのは、生まれ故郷でもある岐阜のまちなかだった。長期的には人口が減少し、経済も縮小している地方都市も、伊藤の目には資源の宝庫に映るようだ。空間はたっぷりある。コミュニティがコンパクトな分、市場では手に入らないマテリアルにも、人づてでアクセスできる。幼少期から培った人脈も活かせるし、それをグローバルなネットワークにも接続できる。加えて、解決すべき切実な課題がある。何ともやりがいのある舞台ではないか。ここで伊藤は、豊富な資源を自在に編む術を鍛えている。そこからは、ポスト近代の建築が姿を現しつつあるようだ。(門脇耕三)



MTNビル

岐阜県内屈指の繁華街・柳ヶ瀬商店街にほど近い、築50年超の鉄筋コンクリート造のビル。2015年ごろから再生が図られ、大学のサテライト研究室やフランス料理店などが入居するビルの一、3階の2戸を全面的に改修し事務所に。1戸を執務スペース、もう1戸を模型製作やストックルーム、打ち合わせ室にあてている。風呂なしアパートであった既存の造作材を活かしたうえ、他物件で譲り受けた廃材や端材を下地・仕上げ・造作家具・可動デスクなどに用いている。



1

海外経験をもつ建築家の多くは、東京で活動する。しかし岐阜県出身の伊藤維は海外に6年滞在したあとに、あえて岐阜に拠点を置いている。

なぜ伊藤は地方に軸足を置くのか。それはアメリカとスイスで過ごすなかで、郊外に可能性を見出したからだ。基点はその場所にある人、建築、自然の要素の共存状態を意識して建築を思考する「アクター・ネットワーク理論」との出会い、そして都市的なものと自然環境のいずれにも接続できる生活の豊かさを経験したことにあるという。

伊藤の作品は、廃材や端材から組み立てられることも多い。これらは場当たりのプリコラージュされているわけではなく、環境と連動させながら、機能や法律、熱環境といった条件を踏まえ、慎重に再構成されている。古ビルの一角にある事務所も、元の「風呂なしアパート」の骨格が残る空間に、廃材や端材を用いてつくられた什器や家具が並び、片隅には廃材が積み重ねられている。それらを伊藤は「余白」と定義し、意図的にストックしているという。そして目的地の定まらないモノや人、場所を抱えながら活動する非近代の「ハイブリッド」としての建築家像を目指して活動を展開しつつある。



2



3

- 1 執務スペースとしている301号室。コンクリートをあらわし、廃材や端材で棚などを設けている
- 2 302号室。窓辺に模型製作や打ち合わせに使っているテーブルがある
- 3 MTNビル外観。スタッフは計6名で、全員が首都圏や関西などを含めた岐阜県外の出身。うち1名はリモートで京都から働く

伊藤 維によるワークプレイスのスケッチ

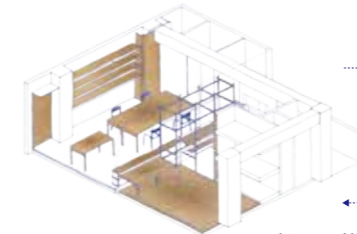
2020-2022

MTNビル

201号室でシェアオフィスをしなが、アパートとして使われていた301号室をまずリノベーションし入居、そして半年後に302号室にも拡張。断熱改修などもしながら、その都度、入手可能な木材で仕上げや家具などを設えてきた。

301 さまざまな来歴の再利用材・古材・端材を利用した執務空間

302 端材・古材を滞留させる倉庫でもある作業・打ち合わせの空間(モノのサードプレイス)



KOPPA

2019年から大工のチームと始めた端材・廃材を再利用/転用する一連のプロジェクトの経験が、他のプロジェクトにも、アイデア・モノ双方の側面で展開している。

パレットをカスタマイズするための木材を提供

プロジェクトで余ったヒノキ板を302の床板に

企画展示 in 京都

同じ出どころの材料を、一方ではオフィスのしつらえに、もう一方ではステージの構造に

その他木材

2023-

UTBビル+MTNビル

街道沿いの3層の空きビルを新たにリノベーションし、事務所・シェアスペース・図書室を拡張。廃品の家具や所有の廃材を利用。

UTBビル

3F New Office

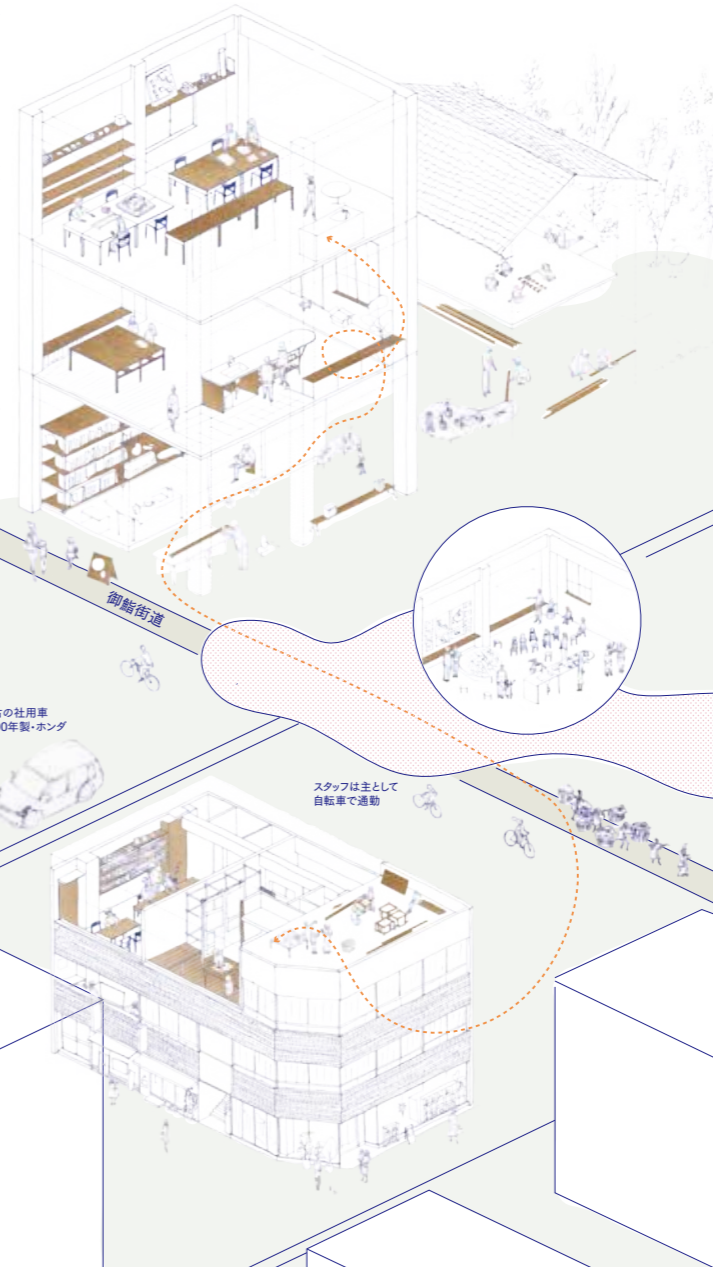
執務スペース・ミーティングスペース・バックヤードなど、事務所専用の空間

2F Share

模型や打ち合わせに使えるが、中高生なども自由に入居できたりイベントも行えたりする。大きなキッチン付きの空間

1F Library・Storage

伊藤事務所の蔵書のほか、社団法人や地域の人の本の管理・一部公開を計画中



【写真※：奥田正治】 【写真※：伊藤維建築設計事務所】



Yanagase PARK LINE 2020



池袋のまちなかりビング(ストリートファニチャー)



stage KOPPA 2020



stage KOPPA 2021 追加面材の制作風景



stage KOPPA 2021



いちご作業所・直売所・遊び場 什器制作風景



いちご作業所・直売所・遊び場



MTNビル 302 木材ストック風景

伊藤維略歴および事務所変遷

1985年
岐阜県生まれ

2008年
東京大学工学部建築学科卒業。
藤村龍至建築設計事務所（現・RFA）に勤務

2008-2014年
シーラカンズK&Hに勤務

2013年
東京にて、伊藤維建築設計事務所設立（その後、各地を転々とする）

2014年
渡米

2016年
ハーバード大学デザイン大学院建築学部 修士課程（MArch II）修了

2017年
コロンビア大学建築大学院（GSAPP）特任助教。同年、渡欧

2017-2020年
スイス連邦工科大学
チューリッヒ校 助手

2018年
ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館 アシスタント・キュレーター

2020年
7月、岐阜に事務所移転。シンガポール工科大学デザイン大学特任助教を務める。同年11月、MTNビル301号室完成

2021年
名城大学非常勤講師を務める。7月に法人化。9月、MTNビル302号室完成

現在
名古屋造形大学 専任講師。2023年2月、事務所拡張移転予定

事務所概要

MTNビル
所在地 | 岐阜県岐阜市美殿町
所有形態 | 賃貸
竣工 | 2021年
構造 | 鉄筋コンクリート造
延床面積 | 57㎡

UTBビル
所在地 | 岐阜県岐阜市靱屋町
所有形態 | 賃貸
竣工 | 2023年
構造 | 鉄筋コンクリート造
延床面積 | 149㎡

UTBビル

2023年、新事務所を構え移転・拡張予定。場所はまたも古ビルの一角。鮎鮎の流通に使われたことにちなみ、御鮎（おすし）街道と呼ばれる旧街道に面して立つ。その最上階にあたる3階を執務スペースとし、あわせて2階はオーナーの「まちに開いた使い方を」という希望を受け、伊藤もメンバーである社団法人「ちまたファクトリ」で活用。まちづくり関係者や地域の高校生などが集う交流の場などとして利用する。また廃材や端材をストックするスペースも拡張し、現事務所よりもさらなる“余白”を抱えた場となる予定だ。



1



2



3



4



5

- 2階。社団法人で借り、用途を1つに定めてまちに開いた使い方を予定
- 建物外観
[写真：伊藤維建築設計事務所]
- 工事が進む新事務所の様子。2022年11月末撮影
[写真：伊藤維建築設計事務所]
- 執務スペースとなる予定の3階。かつてはテイラーの作業場で、鉛製の水道管などが残る
- 3階の一角には、伊藤が教員を務める名古屋造形大学から譲り受けた什器が積み重ねられている

対談

目的地の定まらない資源を抱えながら建築と環境の関係を探る

伊藤 維 × 門脇 耕三

門脇 まずは生い立ちからお伺いします。生まれも岐阜ですか。

伊藤 本巣市という、少し郊外に出たところです。高校で岐阜市内に進学しました。

門脇 どんな高校時代でしたか？

伊藤 学業と並行してバンド活動などをしていました。僕はベース・ボーカルで、オリジナルで曲をつくったり、ライブハウスで演奏したりしていました。

門脇 有料のライブに？ かなり本格的な音楽活動をしていたわけですね。

伊藤 何組か出演するイベントに出たり、ツアーで来たバンドの前座をやらせてもらったりしていました。そこで高校で出会わないような岐阜の大人の多様な価値観や生き様に触れたんです。この出会いの振れ幅の大きさは、岐阜で設計事務所をやっていくうえでの糧になっていると思います。

門脇 そのころから建築にも興味があったんですか。

伊藤 小学生のころから、絵を描いたり家の間取りを考えるのが好きで、設計という仕事は面白そうだと思っていました。

門脇 それで勉強するなら建築だと。進学先として東京大学を選ばれたわけですか。当時の東大は、どんな感じでしたか？

伊藤 東大というよりも所属した千葉学研究室の様子になってしまっていますが、いま建築家として独立している青木公隆さんや海法圭さん、西川拓さん、宮内義孝さんなどが先輩におり、みなさん学生時代からの活躍がものすごかったです。千葉学さんに卒業設計と論文を見てもらいましたが、先生自身のとても発見的なコメントや指摘に大きな影響を受けつつ、加えて研究室全体で、先生と学生と一緒に議論してアイデアをダイナミックに発展させていく感じがあって刺激的でした。

門脇 フラットに創造的な議論を進める雰囲気だったわけですね。でも伊藤さんは大学院には進学しなかった。

伊藤 自分の興味や適性が、どちらかという実践的な条件を踏まえて建築をつくる、その

なかに創造性を入れ込んでいくような方向性だったので、理論を深めるならば実務経験を積んだあとのほうが意義があると思い、まずは働くことにしました。

実務を身に付けてからの留学

門脇 最初は藤村龍至さんの事務所ですね。「批判的工学主義」を唱えはじめたところですね。

伊藤 東大の千葉研と東工大の塚本由晴研究室で一度だけ合同ゼミがあったんです。そのとき藤村さんと知り合って、社会の現実的な動きから建築を論じている人がいるのかと興味をもったことが入所のきっかけでした。

門脇 その後シーラカンズK&Hに5年半在籍されますが、そこではどのようなプロジェクトを担当されたのですか。

伊藤 僕と所長くらいの少人数で進めるものが多くて、住宅2件、集合住宅兼オフィス、保育園、中学校と、在籍5年間でいくつか竣工まで担当させてもらいました。

門脇 規模もクライアントも多様で、現場も担当され、幅広く経験が積めたわけですね。特

に印象深いものはありますか。

伊藤 保育園です。与条件が複雑ながら、いろいろと試行した末にシンプルなプランニングに収めることができ、ユニークな木構造のチャレンジもできました。K&Hが追求していた、おらかな場を創造する流れにかかわることができてよかったですし、他のプロジェクトも含め担当は単純な形に着地することが多く、自身のその後の「単純さ」への方向性につながりました。

門脇 そこから思い立って留学されたのはなぜですか？

伊藤 一番は自分の思考を体系化したいという欲求からですね。日本の大学院より海外のほうが社会人経験をもつ同じ境遇の人が多いと思い、留学することにしました。

門脇 アメリカのハーバード大学デザイン大学院（GSD）を選ばれた理由を伺えますか。

伊藤 自分の出自が都市部でも極端な田舎でもない茫漠とした郊外なので、考えを深めるうえではアメリカがいいのではないかという直感がありました。ロードサイドを論じたロバート・ヴェンチャー、空間のシンプルさを追求したル



イス・カーンの影もあって、自分の興味に近いと思いました。また、エレメンタルによる南米チリにおける一連のソーシャルハウジングもハーバード大学のプロジェクトから始まったもので、実践的に社会と建築の形を接続できるかも、というイメージもありました。

門脇 ご自身の指向と経験を踏まえて選ばれたわけですね。どのようなカリキュラムでしたか。

伊藤 2年間で建築家が主宰するスタジオ課題3つと、数個の座学と演習を毎学期行う形でした。最初は現地のパートナーと郊外の課題を実践的に解決する若手アーバンプランナー主宰のスタジオを、つづいてラカトン・ヴァッサルのアンヌ・ラカトンによる生活風景を断片的な要素から映像で表現するスタジオを取りました。3つ目が実質的な修士設計につながるもので、イニャキ・アバロスのスタジオを選びました。なじみのある地域を選び、端的に言えば「エアコンのいらぬ建築」をつくりなさいという課題でした。ただ、ソーラーパネルやパッシブ技術のようなありきたりな方法で解決するのではなく、熱環境の関係を空間

構成から創造せよという課題でした。

環境関係性のなかにある建築を思考

門脇 建築を地球スケールの熱環境と連続させて考えることが求められたわけですね。

伊藤 はい。視覚のみならず熱環境によっても空間が関係していくことが学べました。それと同時に重要だった出来事が、当時ハーバードに来られていた貝島桃代さんのTAを担当したことです。そのころ貝島さんは「アクター・ネットワーク理論」を通じて、田舎をフィールドに、建築を多様な「アクター」が共存する環境の一要素として思考していることとされていました。

門脇 なぜアクター・ネットワーク理論に惹かれたのでしょうか。

伊藤 人に限らず水や農産物などのさまざまな要素と条件にできるため、これまで捉えどころがなかった郊外や田舎も空間に落とし込んで考えられる手応えがあったからです。そこで修士設計では地元・本州市の廃墟ショッピングモールを、データセンターと農業施設の複合として再生させる提案をまとめました。濃尾平野は地下水が豊富なのでサーバの冷却ができ、幹線道路を通じて超高速通信ケーブルにつなぎやすいためデータセンター向きの立地なのです。かつ余剰の熱を用いて温室を温めるという関係性もつくれたわけです。

門脇 郊外に対する思考を深めながら考えを体系化し、さらにデザインにまで落とし込むことができ、留学は大成功ですね。その後どうされたんですか？

伊藤 貝島さんにお誘いいただき、コロンビア大学で半期、スイス連邦工科大学チューリッヒ校で3年間助手を務めました。貝島さんは

「建築ふるまい学」という講座でスイスと日本の比較研究をしていて、日本の田舎にスイスの学生を連れて行き、現地の人と意見交換をしながら提案を行う課題を毎年行っていました。岐阜でも「木のふるまい学」をテーマに森の生態系と林業、大工、建物という関係性のなかで木の扱い方を考える課題をつくって取り組み、グローバルなネットワークを日本のローカルとダイレクトに結び、思考をダイナミックに動かす醍醐味を感じられました。

門脇 ここで郊外と世界をつなげるという役割を見つげられたことは、のちに岐阜へと帰られた布石となったのでしょうか。

伊藤 そうですね、何らか自分が貢献できる可能性の一端を感じました。加えて、スイスの建築家の生き様に励まされた面もあります。ピーター・ズントーのような世界的な建築家も田舎のほうで活躍していますし、チューリッヒで出会ったスイス人は、週末に登山をしたり、自然を楽しむことを都市的な暮らしと矛盾なく両立させていました。そんな生活の豊かさにも魅力を感じ、岐阜に戻ることにしました。

“人とモノのネットワーク”で建築をつくる

門脇 海外で再発見した岐阜で独立され、どんなふうに仕事の依頼は入ってきたのでしょう。

伊藤 昔からの友だちに再会して動いたものがいくつかあり、ひとつが「岐阜のいちご作業所・直売所・遊び場」です。クライアントは中学校の同級生で、元々パレル関係の仕事をしていたのですが、祖父母がやっていたいちご農家を継ぎました。僕がスイスにいたころに農家を継ぐかもと話を聞いて、「面白いと思う!」と焚き付けたのも手伝ったのか、彼が決断し



岐阜のいちご作業所・直売所・遊び場（2022）

若いいちご農家の子育てしながら農作業や販売を行える拠点。子どもの遊び場も併設されている。250万円と建設費が限られていたため、施主が所有する古いビニルハウス1棟分の構造材や、別物件から出たCLTの端材やブロックをはじめとする農業用部材や余剰材を活用。それらを起点にプリコラージュ的に構造や空間構成を検討し、建築基準法に則って実現した



動きははじめました。その後の行動力はものすごく、直販ができれば利益率が上がることや、時期によって忙しさにムラがあるので収穫の時期以外にもお店ができるよいなど、彼の実感からプログラムを組み立てました。また彼の奥さんが元保育士で、子どもはいちご好きなので彼らが遊べるようにすればお客さんが滞在しやすくなると、遊び場を設けました。農家として独立するためにコストがかかることもあり、建物に使える資金が非常に少なく、建材には使っていないビニルハウスなど余りものを極力活かしました。

門脇 “ネットワーク的”な成り立ちですね。

伊藤 「コノミテラス」もクライアントは中学の後輩です。彼は市議会議員をやりながら、同級生の仲間と福祉施設や教育施設を立ち上げ、地域を良くしようという志を持っていました。喫茶店だった場所を借り、リノベーションして福祉施設にしたいとのことだったので、既存の折衷的な建物の要素をいかに受け入れながらケアするように再編できるか、と考えたプロジェクトでした。

門脇 世代の近い地元の同志と、地元の問題に、海外で勉強したことも動員して取り組むというのはやりがいがありそうです。

伊藤 「いちご作業所」やいまの事務所は、大工も中学の同級生だったりします。一般的な請負とは違った仕事の進み方ですね。

門脇 一方で大きなプロジェクトも動いているようですが、他にどのような仕事がありますか？

伊藤 アメリカやスイスでの知り合いを通じて、

IoT系のスタートアップ企業との継続的な協働、世界的電気機器メーカーの年次イベントのステージ制作、京都のまちづくり会社とのプロジェクトなど、比較的グローバルな仕事もしています。また岐阜市内では食品倉庫兼オフィスのプロジェクトも動いています。アウトプットは多様ですが、海外と地元で培ったネットワーク性と、千葉学さんやシーラカンズK&H、そしてイニャキとアンヌに学んだシンプルシティという両輪を、プロジェクトごとに体現している感じです。

門脇 伊藤さんご自身の方法論が、確立されつつあるところでしょうか。岐阜という地域での、今後の展開を教えてください。

伊藤 いま3年目に入ったところですが、新しい知り合いも増えてきて、既存のネットワークから派生してさらなるネットワークが生まれ、可能性が広がりがつあります。2021年に教育関係者やまちづくりの担い手たちと「ちまたファクトリ」という社団法人を立ち上げました。あくまで形としてアウトプットするのが建築家の本分だとは思いますが、多様な人々が集う場の設定など必ずしも形ではない活動も始めており、両方がうまく組み合わせさせてプロジェクトが発展しそうです。

門脇 請負型のパッシブな建築家像にとどまらず、アクティブに地域に働きかける建築家の可能性が見えつつあるのでしょうか。

伊藤 「アクター・ネットワーク理論」に関連して「非近代」という概念があります。あらゆるものを一義的に定義していく世界観の「近代」とは逆に、あらゆるものは社会や科学など多角

的な視点で捉えることができる「ハイブリッド」であり、その関係性の渦に自分も巻き込まれているのだ、という世界観です。「非近代」の世界観にこれからの希望を感じていて、建築家としても「ハイブリッド」であるとはどういうことかと考えているのですが、よい建築をつくるのはもちろんのこと、かつて地主や百姓が担っていたような「余白」を兼ね備えた建築家像をイメージしています。材料をマテリアル・ネットワークとして抱えていたり、サードプレイスをもっていたり。既に定義されたものしかたないのではなくて、ネットワークされるのを待っているもの、つまり目的地は見えていないけれど漂っている状態のモ人、考えを抱えながら進んでいく建築家のあり方もあるのではないかと考えています。

門脇 東京のような大都市では、すぐに結論を出したがる傾向があり、それが人やモノがある可能性に限定してしまうことにもつながりかねない。でも地方ではそうではない可能性を示せるということですね。

門脇耕三 かどわき・こうぞう

建築家・明治大学准教授・アソシエイツパートナー／1977年神奈川県生まれ。2000年東京都立大学工学部建築学科卒業。2001年同大学院修士課程修了。首都大学東京助教などを経て現職。博士（工学）。近著に、『ふるまいの連鎖：エレメントの軌跡』（TOTO出版、2020）など。

平塚 桂 ひつつか・かつら

編集者、ライター／1998年京都大学工学部建築学科卒業。2001年同大学大学院工学研究科環境地球工学専攻修了。2000年ばむ企画を共同設立。

muihaus. (2022)

生活の豊かさを目指したスマートハウス。IoTデバイス等を開発するmui Labと、ITで家づくりの変革を目指すJIBUN HAUSとの共同開発。四方向同じ立面で、回遊性が高く家族同士および外界とのつながりを感じられる設計が特色。2022年11月、初の実例が佐賀県多久市のスマートタウン「SCOLTOWN」に竣工、販売開始された【写真：伊藤維建築設計事務所】



コノミテラス（2022）

元喫茶店だった平屋を改修した放課後等デイサービス。天井高のある空間や木の架構、仕上げ、設備など既存の要素を活かし、障がいのある子どもたちの発達支援を促すべくあえて段差を設けている。施主の「第2の家のような場であってほしい」という思いから天然木が多用され、また転用した現場解体材や伊藤事務所のストック木材も各所に用いられている

災害時には、重量鉄骨や鉄筋コンクリートで仮設住宅はつくれません。

非常時は木材が頼みの綱。国産で調達できるところにも意味があります。

金属接合部材も造作とコストの規模を上げてしまいます。そこで金物を使わない木造、

しかも一部自分の手で木組みできるような架構を考えました。いわば根性系の構造です。——黒岩裕樹

取材・文 | 高木伸哉



CLTの組積アーチで覆われた神水公衆浴場の2階ダイニング。アーチはCLTの接合部に千切りを打ち込んで継いだ嵌合接合で構成される [写真：小川重雄]

構造家の新発想 | 16 黒岩裕樹

金物を使わない木造架構

当連載でベニアハウスを紹介した構造家・鈴木啓の事務所出身の黒岩氏は、

ベニアハウス同様金物を使わない木造架構に造詣が深い。

今回はCLT部材を組み合わせた嵌合接合、込み栓による金物を使わない木造架構に焦点を当てる。

熊本を拠点に活動する黒岩氏は、2016年の熊本地震で被災したことを契機に、まちの防災拠点、

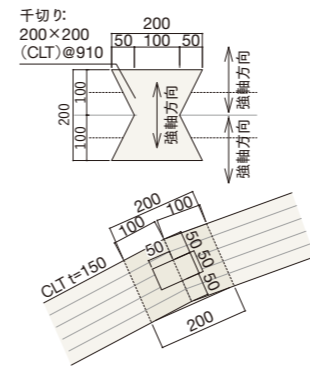
コミュニティスペースを生み出すべく、自邸に併設した銭湯を運営するアクティビストでもある。

黒岩裕樹 くらいわ・ゆうき

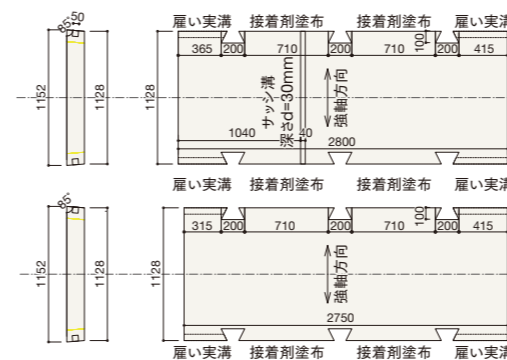
1980年 熊本県生まれ。2003年琉球大学環境建設工学科卒業後、鈴木啓/ASAに入社。2006年黒岩構造設計事務所設立。2008年九州大学大学院博士前期課程修了。2013年熊本大学大学院博士後期課程修了。2021年より九州大学大学院非常勤講師。主な著書に『構造設計を仕事にする』（共著、学芸出版社、2019）がある。

高木伸哉 たかぎ・しんや

編集者 / 1965年北海道生まれ。1991年芝浦工業大学大学院建設工学科修了。1991-2000年鹿島出版会『SD（スペース・デザイン）』編集部勤務。同誌副編集長を経て、2001年ブリックスタジオ設立。2002年より同社を共同主宰。2020年4月より同社主宰。

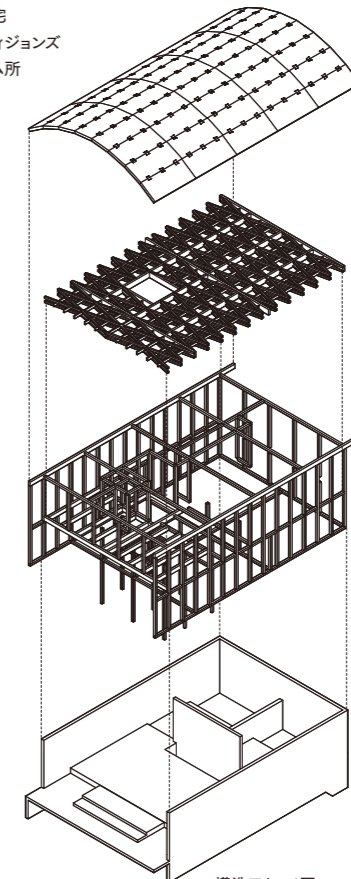


CLTアーチの接合部（下）と打ち込む千切り（上）
[提供：黒岩構造設計事務所]



切り出したCLT板の部材構成 [提供：黒岩構造設計事務所]

主要用途 | 公衆浴場併用住宅
意匠設計 | 西村浩+ワークヴィジョンズ
構造設計 | 黒岩構造設計事務所
延床面積 | 193.96㎡
主体構造 | 木造
竣工 | 2020年6月



構造アクト図
[提供：ワークヴィジョンズ]



1



2

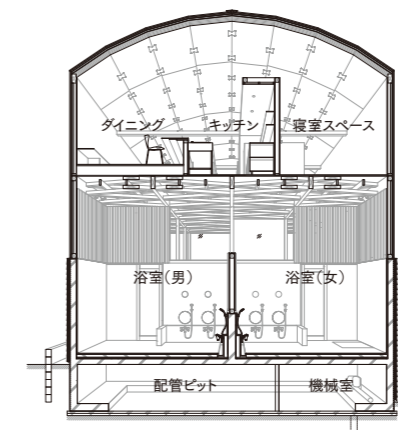


3

- 1 天井に打ち込まれた千切り
- 2 工場で切り出された千切り
- 3 CLT工場での千切り打ち込み作業の様子。1つの屋根ユニットは8枚のCLT板で構成される
- 4 屋根の建て方風景。アーチ状に工場で組み立てたCLTの屋根ユニットをクレーンと人力で施工した [写真1-4：黒岩構造設計事務所]



4



断面パース。水まわりのある1階は中間層まで鉄筋コンクリート造、その上が木造となっている [提供：ワークヴィジョンズ]

01

千切り接合のCLTアーチ

くわみず
神水公衆浴場@熊本市中央区

近年は鉄骨資材の高騰や、木材利用の期待などから、木造への注目は高まっている。そのときの課題のひとつが、接合方法だ。金物の使用が一般的だが、そこにコストが偏重してしまう。特に低層で低コストの木造架構では、接合金物が占めるコストの割合が大きくなり、工夫が求められるところ。そこで黒岩氏は、金物を使わない木造架構をいくつも考案している。そのひとつが「千切り」を使う方法。1階を自身が運営する銭湯、2階を自邸とする建物の屋根架構で実践された。

CLT板を継いで屋根のアーチ・ユニットをつくり、それで8m強のスパンを飛ばすことを考えました。厚さ150mmのCLT板を8枚付き合わせてアーチを形成します。その板同士の接合にCLT専用のXマーク金物などは使わず、蝶の形をしている木製の千切りで接合したのです。千切りはCNC工作機で同じCLTを切り出してつくります。

アーチは接合部分で大きな引張り力や曲げモーメントは発生しない。そこでこの千切りだけで接合が可能になっているのだ。またアーチ施工には架台を組んでその上で組み立てるのが一般的だが、ここではその架台も省略。アーチ形状を工場で組み立てユニット化し、クレーンで施工した。

クレーン吊り上げ時に、アーチに曲げの力が働くのですが、その施工方法に耐えられるか、応力を試験しました。金物を使わない架構には、実証実験が付きもの。実は熊本の自分の事務所からそう遠くないところに実験施設がありまして、それを頻りに利用できるからこそ、新しい試みに挑戦できると言えますね。

金物を使わない嵌合接合は伝統工法がベースになるが、かつて必要であった加工の手間をIT技術に、経験値を実証実験に置き換えることで、現代でも使える工法になるのだろう。

込み栓の 重ね透かし柱

大濠テラス@福岡市中央区

一般的な門型フレームでも、金物を使わない嵌合接合が開発された。柱、梁、接合部材、すべてが厚さ60mmのCLTパネルだけを組んでできているのが特徴だ。柱、梁ともに2枚の長いCLT板で接合板を挟み、込み栓で結合して、合わせ柱と合わせ梁にするという考え方。3層構造で、接合部以外は透かしになっている。

この架構の難しい点は、柱と梁の接合部。応力集中する箇所であるうえに、接合治具による断面欠損が多くなって強度が出せなくなるところ。だから金物で解決しようとされてきた部分です。そこで考えたのが、柱と梁を直接接続せずに、L字、T字の継ぎ部材を経由させることでした。

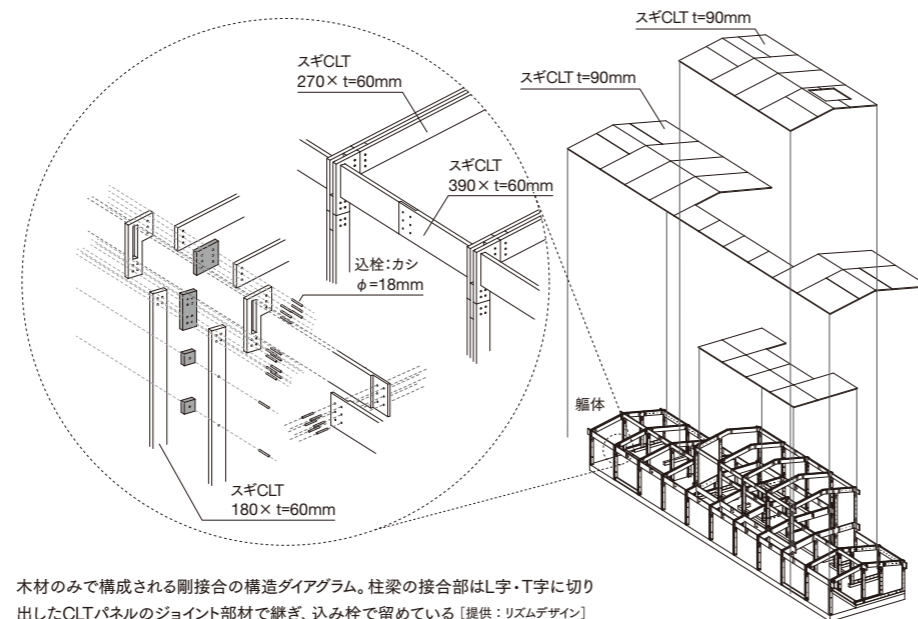
継ぎ部材もちろんCLT。この継ぎ部材をかませることで、柱梁の断面欠損は最小限に抑えられている。また、桁の結合はこの継ぎ部材に穴を開けて貫通させた、貫構造。そうすることで柱梁には断面欠損が生じることはない。部材とその応力が集中する接合部を、金属ジョイントの代わりに、木製ジョイントが引き受けているかたちだ。このジョイントは安価で簡単につくれることが必要で、そうでなければ金属の代わりにならない。そのためジョイントは2次元形状。柱梁と同じCLT材が流用され、精度は高いが普及しているCNCで簡単に切り出しが可能だ。2次元形状でも、貫も合わせると多軸の3次元の応力を引き受けられる。

とは言っても、木造の嵌合接合は、めり込み変位や込み栓の曲げ変位が生じ、構造の変位が大きくなるという弱点があります。そこで今回は、接合部面に構造用接着剤も使って剛性を高めました。

この接合技術はやはり剪断の実証実験が行われ、大地震でも弾性域の変位にとどまる性能が認められたとのこと。前ページの架構と同様、特殊な技術や工具を必要とせず、誰もが組み立て可能であるところも大きな意味を持っている。

主要用途 | 休養施設
意匠設計 | リズムデザイン
構造設計 | 黒岩構造設計事務所

延床面積 | 199.88㎡
主体構造 | 木造
竣工 | 2020年8月



木材のみで構成される剛接合の構造ダイアグラム。柱梁の接合部はL字・T字に切り出したCLTパネルのジョイント部材で継ぎ、込み栓で留めている【提供：リズムデザイン】



1



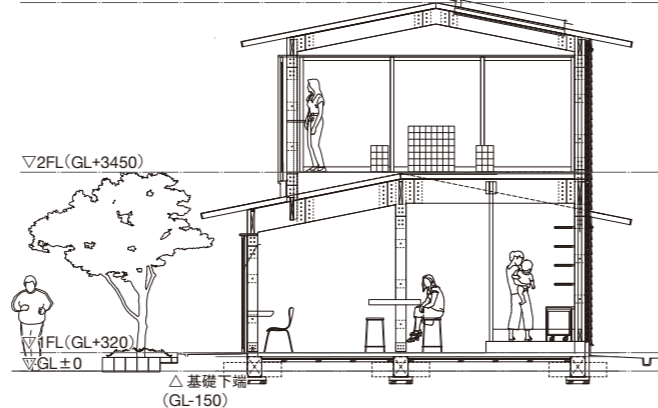
2



3

- 1 カシ材の込み栓を打ち込みCLTのジョイント部材と一体化する構造体の概念模型
 - 2 躯体フレームの建て方風景。梁をフレーム側のジョイント部材にたたき込む
 - 3 1階部分の柱梁接合部。11種類の躯体フレームと、20種類のCLTジョイント部材で構成される
- 【写真1-3：リズムデザイン】

▽建物最高高さ(GL+6395)



短手方向の断面構成
【提供：リズムデザイン】

》》》》INSPIRATION | 構造家のリスペクト

発想の原点がここにある。構造家がリスペクトする歴史的建造物のひとつ

建築も素朴に根性を発揮することがある

【読谷山窯】

@沖縄県読谷村 設計・構造：洲鎌朝夫+匠設計 竣工：1980年



使用済み木製電柱のバットレスが石灰岩の礎石に接続された外観（左）および販売所の内観（右上）。小屋組みにも電柱が用いられている。屋外に突き出した登り梁と横架材のディテール（右下）【写真：黒岩構造設計事務所】



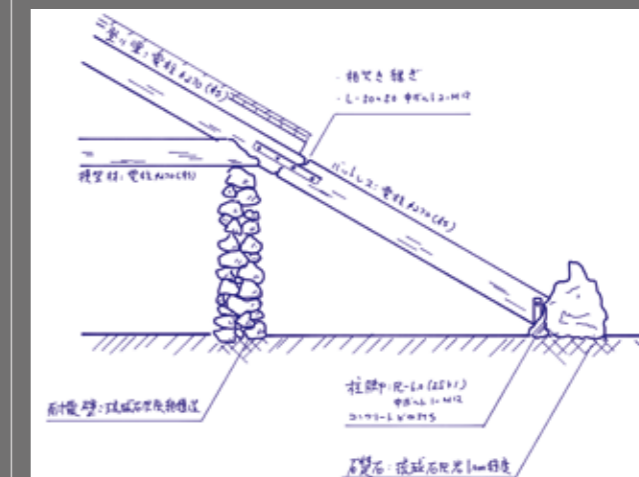
これは沖縄県読谷村にある登り窯。名産である読谷山焼の、窯元が建設した登り窯のひとつだ。登り窯とは、傾斜地にレンガ造の窯を組んでゆき、低地部で火を焚き上方へ熱を伝える巨大な窯で、窯を保護する建屋が必ず建てられる。黒岩氏はこの建屋をリスペクトしているという。

一言で言うと、根性系の建物。それが好きですね。根性系というのは、身近にある素材を使い、明解で単純な方法で、自らの手で組み立てる、そんな泥臭い建築です。沖縄は台風が頻繁にきます。風の水平力に抵抗するため、この登り窯は、外からバットレスのような頼杖支柱でダイレクトに屋根の水平力を支えているんです。しかも、沖縄返還直後の建材不足に伴う木製電柱の再利用で。

読谷山焼は素朴さが特徴。古来からの登り窯を守るという陶工が、読谷村に集まり、器の特徴

同様な、いくつもの登り窯の素朴な風景が形成されているが、そのうちのひとつが黒岩氏の目に留まった。小屋組みはおおむね洋風で、登り梁の下端が軒下まで突き出し、軒を支えている。さらにその合掌が木製電柱に継がれ延長して、巨大な礎石で留められている。礎石からバットレス支柱、登り梁、棟木まで一直線。その構成だけ

で、小屋組みに剛性などなくても、どんな台風にも勝てそうな勢いだ。小屋組みはすべて丸太を使用。余計な加工はせず、素朴で単純で無理がなく力強い。何よりメンテナンスするのに特別な技術はいらない。人の手をかけやすく、だからこそ長く使っていけるのだ。根性系とはまた、最先端のSDGsを示した建築とも言えよう。



断面構成。戦前に焼かれた瓦と長さ18mの使用済みの電柱を集め、そこに野積み石を合わせている【提供：黒岩構造設計事務所】

使いやすさと 堅牢さを極めた 素材と形

建築には人が直接手で触れる部位がある。それは人と建築の関係が濃密に築かれる触覚デザイン。非日常を演出する場では、華やかに彫刻のような存在感を放つドアハンドルも、使いやすく堅牢な機能が徹底追求される。そうして最適解を求めたデザインは、いくつかの形式に収斂されてゆく。

前川國男 まえかわくに お
建築家 (1905-1986) / 新潟県生まれ。1928年、東京帝国大学工学部建築学科を卒業すると同時に渡仏し、ル・コルビュジェのアトリエに入所。1930年の帰国後アントニン・レーモンドの元で学び、1935年に前川國男建築設計事務所を設立。公共建築の分野で近代建築運動を展開し、1959年より4年間日本建築家協会会長を務めた。朝日賞、国際建築家連合オーギュスト・ペレ賞、日本建築学会大賞、毎日芸術賞、日本芸術院賞などを受賞。

触覚デザイン | 13 前川國男の ドアハンドル

ナビゲーター | 笠原一人 (京都工芸繊維大学助教)
制作協力 | 橋本 功 (前川建築設計事務所)

「前川國男によるドアハンドルの形のバリエーションはそう多くはない。しかしそれは十分信頼できるものしか使わないからです」(笠原氏)。

たとえば鼓のように中央がくびれた木製ドアハンドルは東京文化会館、埼玉会館、弘前市民会館などで繰り返し用いられている。手になじむ形状で風合いも柔らかいが、前川建築設計事務所代表の橋本功氏によると無垢材に樹脂を含浸した強化木が使われており、「石と同等の強度があり、非常に重い」(橋本氏) 質実剛健なものだ。現在は同タイプの製品が建築金物メーカーのユニオンに存在するが、「昔のものは長さや接合部の仕様が少しずつ違っており、その都度ユニオンに特注していたと考えられます」(橋本氏)。

前川國男は既製品をアレンジすることもある。たとえば橋本氏が設計にかかわった国立音楽大学講堂ではユニオンの製品を元に、素材

と形状に変更を加えたドアハンドルを製作した。「既存の製品は持ち手が角ばっていてつかむと少し痛いので、角を丸めたものを型から起こしました。太さは3パターンほど試作し、実際に学生に触ってもらって決めました」(橋本氏)。機能や環境に応じて細部をカスタマイズし、改善を繰り返す姿勢が見える。

東京文化会館や京都会館の出入り口など、ある時期までのドアハンドルには華やかで個性的なものもある。しかしそれらは音楽ホールの出入り口という高揚感が求められる部分に限定的に用いられていた。やがて時代とともにドアハンドルは一定の形へと収斂されていく。

「テクニカル・アプローチというキーワードを掲げ、打ち込みタイルをはじめとする建築の基礎的な技術を開発した前川には、確かなものを求め、ある形式に収斂させていく意志が感じられます。ドアハンドルにおいてもある形を軸に継

続的に改善を加えながら、性能がよく、確実に機能するものを追求しています。既製品も“安価な量産品”として捉えずに安定した製品として信頼し、さらなる改善を加えているのです」(笠原氏)。

笠原一人 かさはらかずと
京都工芸繊維大学助教 / 1970年生まれ。1998年京都工芸繊維大学大学院博士課程修了。2010-2011年オランダ・デルフト工科大学客員研究員。著書に、『ダッチ・リノベーション』(鹿島出版会、2021)など。

橋本 功 はしもと・いさお
建築家 / 1945年神奈川県生まれ。1970年日本大学理工学部建築学科卒業、前川國男建築設計事務所入所。2000年、前川建築設計事務所代表取締役就任。主な担当作品に、福岡市美術館、埼玉県立自然の博物館、千葉県東総文化会館などがある。

平塚 桂 ひらつか・かつら
編集者、ライター / 略歴は43ページ参照

- 1 正面扉のドアハンドル。無垢材を木彫刻のように削り出した。外側の縁は薄く繊細。一方、上下端は肉厚で、へこませながら丸みを帯び、おそらくこの上端に手を掛けて押し引きすることが想定されている
- 2 ホール出入口
- 3 東京文化会館正面入り口
- 4 ホール出入口扉のドアハンドル。細長い鼓の形。樹脂含浸の無垢材が使われている



2

り返った屋根が人々を迎え入れるように立つ音楽ホール。建物の正面扉に無垢材が3次元に削られた、木目が透ける赤い塗装のドアハンドルが残る。「華やかで視覚的な目印にもなる。設計を担当した当時のスタッフ・大高正人のダイナミックな造形センスと、音楽好きな前川の思いが、人々の高揚感を高めるようなドアハンドルのデザインへとつながっているのかもしれない」(笠原氏)。ホール出入口扉のドアハンドルは、前川がさまざまな施設で頻りに用いる鼓状のタイプの初期例で、現在のものは2014年の改修の際にユニオンに依頼し、金属の接合部以外を同じ形で再製作した。「ここが初出なのかは不明ですが、正面扉のものとともに、屋根の反りに対応させてデザインされたのかもしれない」と笠原氏は推測する。



3



4

東京文化会館 正面入り口ドア

1961年 / 東京都台東区

ロームシアター京都 パークプラザ1階入り口ロドア

京都会館として誕生し、大規模改修を経て2016年に現名称でリニューアルオープン。パークプラザ1階入り口にオリジナルの扉が残る。そのドアハンドルは扉の枠に角形スチールバーを斜めに取り付けた特徴的なもの。この構成を笠原氏は「視覚的に認識しやすくするばかりではなく、枠の補強としても機能させているのではないかと推測する。橋本氏も「スチールの扉は重く、傷みやすい。さらにこの扉は幅も広いので、補強材を入れて剛性を高めることは理にかなう」と見解を述べる。持ち手の部分には真鍮と思われる金属が紡錘状に巻かれ、握りやすい。視覚的にも触覚的にも機能し、かつ補強として扉の安定性を高めた可能性も示唆される多義的なドアハンドルだ。



1



2

- 1 パークプラザ1階入り口扉のドアハンドル
- 2 パークプラザ1階入り口



1

大小のホールを中心とする複合施設。他の建築にも数多く登場する、鼓状にくびれたドアハンドルが随所に使用されている。「中心をへこませることで手を誘導し、握りやすくしている。かといって細くしすぎると弱くなる。強度と認識しやすさのぎりぎりを狙ったデザイン」と笠原氏。中庭扉のドアハンドルは竣工時のもので、金属部分に緑青がふいている。弘前市民会館でも近い仕様のものが用いられ、その図面の表記から金物の素材は銅と錫の合金である砲金製と推測されるという。ホール扉のものは2017年の改修の際に付け替え。東京文化会館の改修時にユニオンに特注したものと同一タイプのドアハンドルを取り付けている。



2

- 1 中庭入り口扉のドアハンドル。ハンドルは枠に取り付けるため、開き戸の左右ハンドルが近接しすぎて手が掛けにくならないよう、接合金物はL字を使い適切な距離をとっている
- 2 ホール扉のドアハンドル。こちらはガラス扉ではないため適切な位置に設置できるので、接合金物はストレート形状

埼玉会館 中庭出入り口ロドア

1966年 / さいたま市浦和区

国立音楽大学 講堂エントランスドア

1983年 / 東京都武蔵村山市



1

大学キャンパスの一角の、大小のホールとリハーサル室からなる施設。正面や中庭など複数の出入り口に、ユニオンの既製品をアレンジしたドアハンドルが用いられている。「握りやすいように太さを変え、丸みをつけました。強度を出すため端部の削りも少し変えています」と橋本氏。金属製のドアハンドルを選んだ理由はガラス扉に対し「表裏のドアハンドルを鏡のように対称に見せたかったから」（橋本氏）で、内部と外部で経年変化に差が付きやすい木製を避け、さらに既製品の南部鉄は錆が出やすいので耐食性に優れた真鍮に変更したという。「元になった既製品も〈岡山県天神山文化プラザ〉(1962)や〈横浜市中区役所庁舎〉(1983)などに使われています。既製品を信頼し、さらなる改善を加えるという収斂への意志が感じられるドアハンドルです」（笠原氏）。



2

- 1 講堂エントランスのガラスドア
- 2 講堂エントランス扉のドアハンドル。既製品をカスタマイズして、触覚デザインを完成させてゆく



1



2

埼玉県立歴史と民俗の博物館 特別展示室側非常口ドア

1971年 / さいたま市大宮区

「1976年竣工の熊本県立美術館とともに中田準一というスタッフが担当したもので、よく似たドアハンドルが用いられている」と橋本氏。その1つは特別展示室側の非常口に用いられている、中央が膨らんだ年輪模様の台形状の押し板。「積層合板を削り出して製作しているのでしょうか。木の素材感が視覚的にアピールし、手触りもよい」と笠原氏。もう1つは紡錘状。木を削り出してつくられたと考えられ、年輪の模様が浮き出る「板目」を正面に向けて取り付けられている。「同じタイプのものを熊本県立美術館の図面では「ユニオン オリジナル押し棒」と表記しています」と橋本氏。ユニオンへの特注と推測されるドアハンドルだ。「数多く使われている鼓状のものとは逆に、太鼓のように膨らませて、バリエーションを与えています」と笠原氏。



3

- 1 特別展示室側非常口扉のドアハンドル。合板を積層させた材を山状に削り出した。1枚1枚のランバーが、等高線のように見える
- 2 エントランス脇階の吹き抜け扉のドアハンドル。多くは鼓状に中央が細くなっているが、こちらは逆に太く紡錘形になっており、歴史博物館の重厚さに通じているようだ
- 3 特別展示室側非常口

土木のランドスケープ | 16

渋谷川

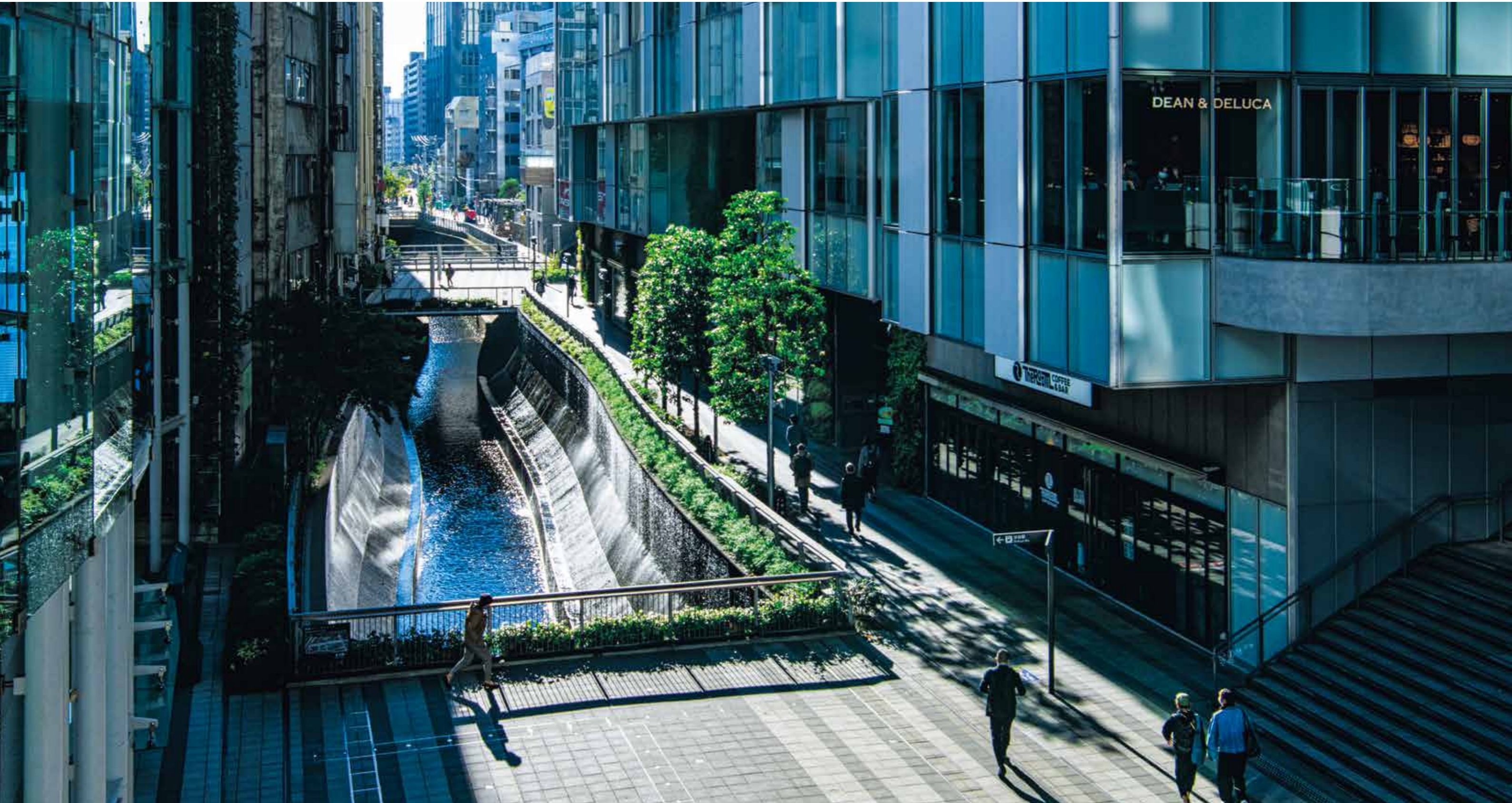
東京都渋谷区

ナビゲーター・文 | 八馬 智 (千葉工業大学教授)

写真 | 新良太 (特記以外)

土木施設はその機能を果たすために、時として人を遠ざけてきたが、徐々にその巨大な体を開き、人に寄り添いはじめた。公共空間として、ランドスケープとして、人の手に復権された新しい土木の景色をみつけてみよう。

100以上の河川が流れる東京都内において「渋谷川」は、とりわけ多くの人にとって、その名に聞き馴染みがあるのではないだろうか。しかしながら、まちで買い物をしている自分の足下や、地下鉄に乗るために駅構内を移動している自分の頭上を、渋谷川が流れていることを知る人は決して多くないだろう。唱歌「春の小川」は渋谷川支流をモデルにしたとも言われており、かつては田園の中を流れるのどかな川だった渋谷川は、まちの都市化が進む流れで大部分が暗渠化されたが、そんな渋谷川が近年再び脚光を浴びはじめている。時代の要請とともに姿を変えながらも、都市に存在しつづける渋谷川の現在を紹介する



人の流れを再生する都市河川

ビルの谷間を流れる川

渋谷駅から続くデッキを歩き首都高をくぐると、水の流れがビルの隙間からわずかに見えてくる。地上に下りて近づくと、壁から水がしたり落ちて、心地よい音を奏でながらコンクリートの水路に注いでいることがわかる。そこにある水の流れは、渋谷という谷地形をつくり出した渋谷川の現在の姿だ。川沿いには、ビルに囲まれた細長い空間がその幅を変えながら連続しており、さまざまな人が思い思いに歩いている。かつてビルの背に挟まれ、裏を流れて気づかれなかった渋谷川が、街の表に切り替わったのだ。

ここは「渋谷リバーフロント」と名付けられた渋谷駅南にある渋谷川沿いの遊歩道。再開発に伴い、官民連携により、都市再生特別地区制度に基づいて整備されたものだ。東急東横線渋谷

駅の地下化に伴い、東横線渋谷駅ホームおよび線路が地上駅としての役割を終えたことを機に、影の存在だったコンクリート三面張りの渋谷川周辺を憩いの空間とすべく、さまざまな工夫が施されている。

大規模複合施設の「渋谷ストリーム」に面する約60mの区間では、高度処理した下水である清流復活水を渋谷川護岸の上端から流す「壁泉」という仕組みがしつらえられている。これは1995年より清流復活事業としてもっと下流の並木橋の位置で流されていた再生水を、新たな演出を加味して上流部から流すようにしたものだ。一部には河川の断面を拡張し、緩傾斜護岸として緑化した区間もある。さらに、もともと蓋をかけることが可能な構造であることを活用して、河川上に滞留空間となる2つの広場を設けている。

こうして高密度な都市にわずかながらも豊かな余白がもたらされ、自由なアクティビティが誘発された。渋谷川に背を向けていた建物も、少しずつではあるが、水面を向きはじめています。

都市に埋め込まれた川

渋谷駅から北側では渋谷川は地下に隠れているが、流れをたどるとその存在を発見できる場所がある。ひとつは渋谷駅地下の自由通路。巨大な梁かと思いきや、それはコンクリートに包まれた、まさしく頭上の天井川。行き交う人はみな渋谷川をくぐって歩いているのだ。さらに上流には、小規模なショップやカフェが立ち並び、緩いカーブが連なりながら渋谷と原宿を結んでいる「キャットストリート(旧渋谷川遊歩道)」。足下に、いわゆる暗渠として現存しているのだ。



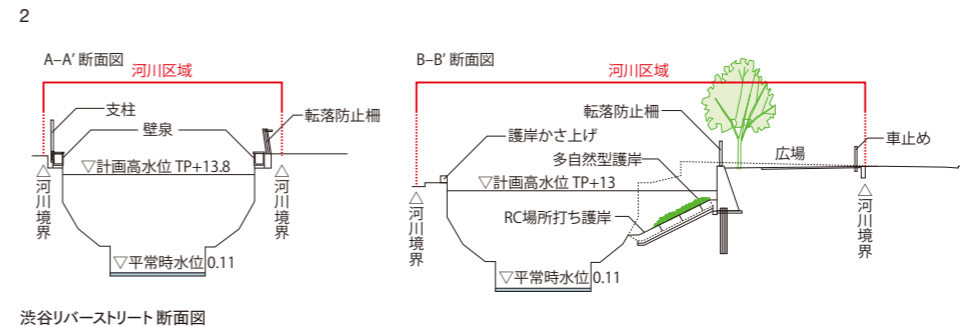
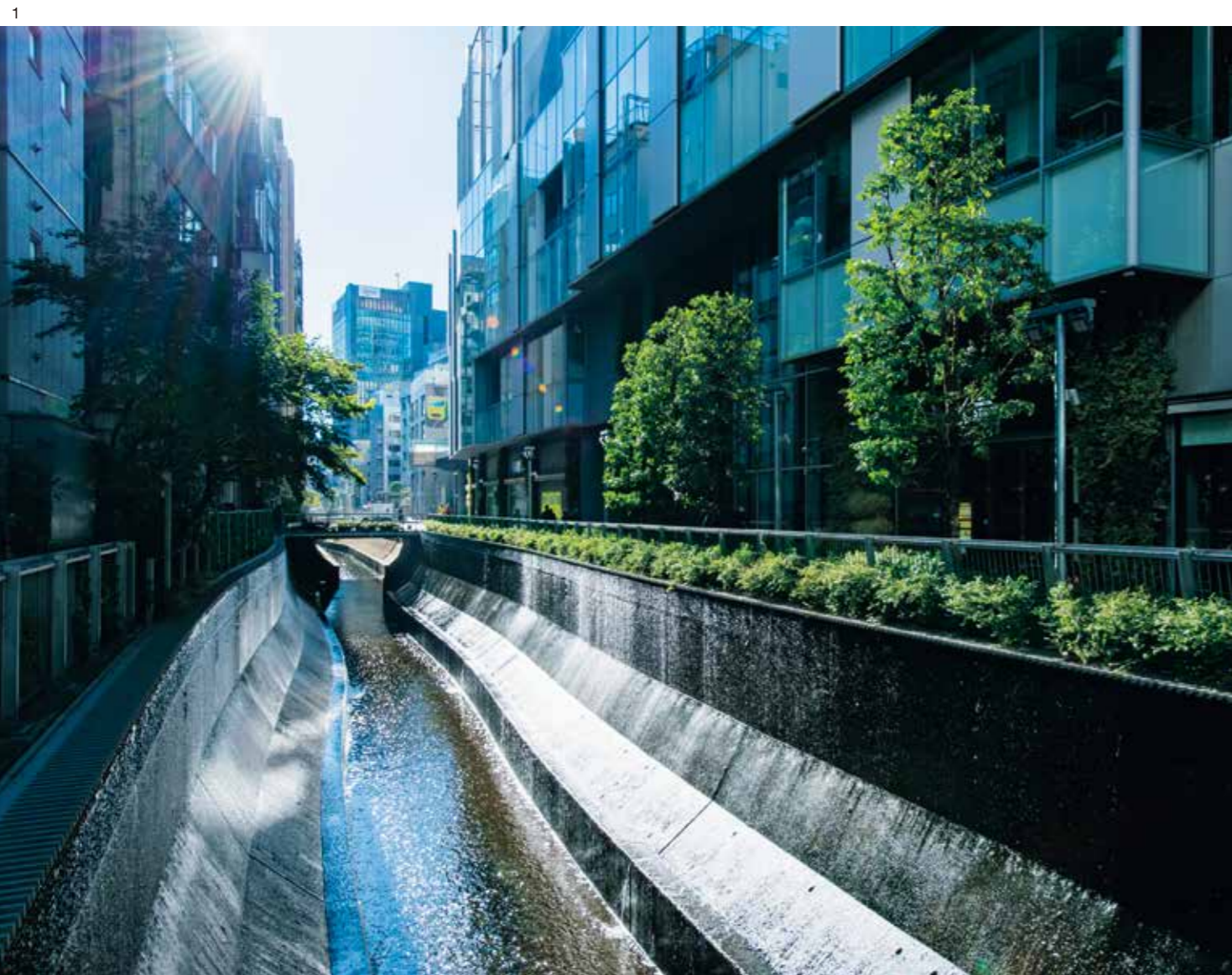
4



5



6



渋谷リバーフロント断面図

- 1 渋谷ストリーム前 稲荷橋広場から渋谷川を見る。護岸の上端からは「壁泉」が流れており、視覚的にも聴覚的にも川を感じることができる
- 2 イベント開催時の渋谷ストリーム前 稲荷橋広場の様子。広場には渋谷ストリームの2階へ続く大階段が隣接しており、建物に囲まれたスペースでありながらも開放的な空間が生まれている
- 3 渋谷ストリーム前 金王橋広場に渡されたデッキから下流方向を見る。渋谷川の両岸に立ち並ぶビルの隙間を縫うようにして道が設けられている
- 4 上流側の道から幅員が広がるA区間にはランダムにベンチが置かれ、動線空間でありながらも川沿いのオープンスペースとなっている
- 5 徒歩橋の付近で上流方向を見る。B区間には緑に囲まれた休憩スポットが設けられており、昼時になるとC区間に停車しているキッチンカーで買った食事を取る人の姿も見られた
- 6 緩傾斜護岸が整備されたC区間



1

かつて田園の中をのどかに流れていた都内の中小河川の多くは、周辺地域の急速な市街化に伴い、表面をコンクリートなどで被覆した三面張りの排水路という形で整備された。そこに生活排水が流れ込むことで非衛生的な環境が生まれ、迷惑施設として人を遠ざけていった。そして、その多くが高度経済成長期に下水道幹線として蓋がかけられるようになったのだ。キャットストリートは1960年代に暗渠化され、住宅街の中に溶け込んだ。1980年代から区の事業として一帯の整備が進められながら、現在のまち並みが形成されていったという。一時期は日影に追いやられていた川が、ファッションの発信地として脚光を浴びる余白の空間に変化したのだ。

暗渠歩きは、見方を変えると、時間軸を行き来しながら水の流れをトレースする特別な体験だ。地形を読み取って水の流れを想像し、かつての人々の生活を思い浮かべながら、現在の風景を重ね合わせてみる。これはある意味足下の川の復権といえよう。旧渋谷川にはそうたくなる魅力がある。

都市の余白の変遷

いま川面が見えている渋谷リバーストリートのある開渠区間でも、1960年代後半には暗渠化してほしいという要望があったため、あとから覆蓋化が可能な構造で整備されてきた。ところ

が、治水対策を優先する予算面からの理由や、親水機能を重視する河川整備の考え方の変化などがあって、開渠のまま残されてきた。結果的に現在は、水音を聴きながら周囲を散策できている。

その一方で、あくまでも防災が前提となる都市内の水環境は、水辺に下りて直接水に触れることはできず、水生生物のゆりかごとなる環境からはほど遠い。河川が本来もっている自然の要素と、人間の都市活動に求められる要素との折り合いは、なかなかつかないままである。それでも川面がもたらす空間の魅力や暗渠特有の雰囲気が見直され、積極的に都市に再び取込まれるようになったのだ。

開渠と暗渠の2つの顔をもつ渋谷川は、もはや原初の姿を見ることはかなわない。姿かたちを変容させるとともに、表と裏の立場を緩やかに変えながら、都市に細長い余白をもたらす存在となっている。その余白のありようも時代とともに変遷し、現在ではさまざまな立場の人が入り込める緩衝地帯のような、あいまいで居心地のよい雰囲気をまとっている。再解釈された川面を眺めて音を聴くとともに、想像によって地中の川の流れを感じることで、移ろいゆく都市風景を見通すことができるのかもしれない。これからは渋谷川は、象徴的な意味合いを伴って、多くの人の心に根ざし、にぎわいのあるまちを支えていこう。



2

- 2019年11月にオープンした、渋谷駅の地下2階に位置する渋谷駅東口地下広場。写真右上に写る、天井に沿って広場を貫くボリュームの中を、渋谷川が流れている。広場オープン時には作品展示が行われ、渋谷川が流れるボリュームの側面には、渋谷川から着想を得た平面作品が展示された【タイトル：渋谷駅東口地下広場①、提供：渋谷駅前エリアマネジメント】
- キャットストリートの通称で慣れ親しまれている、旧渋谷川遊歩道路。暗渠化された渋谷川が地下を流れており、道の形状から開渠時代の渋谷川の面影が垣間見える【写真上提供：八馬智、写真下：編集室】

取材協力：赤松佳珠子（シーラカンズアンドアソシエイツ/CAT）、遠藤郁郎（東急設計コンサルタント）、高山英男＋吉村生（暗渠マニアックス）

八馬智 はちま・さとし
千葉工業大学教授／1969年千葉県生まれ。1995年千葉大学大学院修士課程修了。株式会社ドーコン（旧・北海道開発コンサルタント）勤務などを経て現職。博士（工学）。著書に『ヨーロッパのドボクを見に行こう』（自由国民社、2015）、『日常の絶景：知ってる街の、知らない見方』（学芸出版社、2021）がある。

渋谷川 概要
所在地 | 東京都渋谷区（宮益橋～天現寺橋）
延長 | 2.6km
流域面積 | 14.0km²
種別 | 二級河川
管理者 | 東京都

渋谷リバーストリート 概要
事業名 | 渋谷川環境整備事業
所在地 | 東京都渋谷区渋谷3丁目地先～東1丁目地先
延長 | 約600m
工期 | 2015年11月～2018年7月

事業者 | 渋谷区（河川管理者）、東急（旧・東京急行電鉄）（整備者）
設計者 | 東急設計コンサルタント
外構アクティビティデザイン | 日建設計、石勝エクステリア
施工者 | 渋谷駅南街区プロジェクト新築工事JV（東急建設・大林組JV）

渋谷川の今と昔



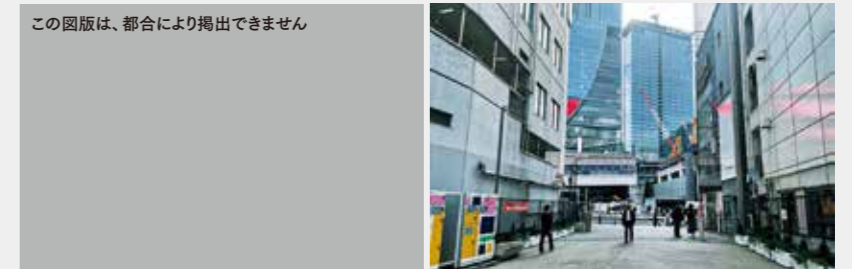
渋谷川 広域地図



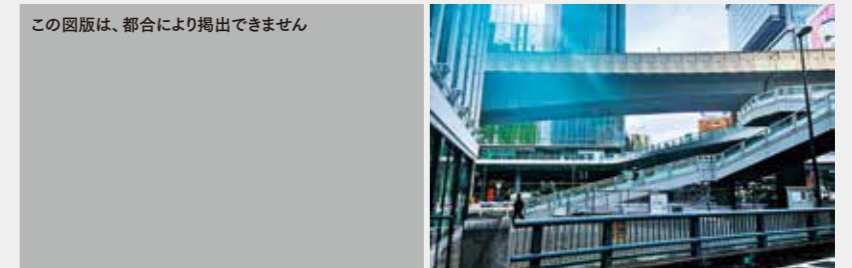
①② 複数ある渋谷川の源流のなかでも代表的な、新宿御苑内の「下の池」(左)。下の池の北側に位置する「玉藻池」の水も、渋谷川に流れている。明治神宮御苑内の「清正井（きよまさのいど）」(右)は、JR原宿駅の下を通過して渋谷川の暗渠へと流れている【写真：編集室】



③ 左は1959（昭和34）年に撮影された穂田橋の写真。穂田橋の橋銘板は、現在もキャットストリート内に現存している【写真左所蔵：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、写真右：編集室】



④ 左は1957（昭和32）年に撮影された旧東横百貨店前の写真。渋谷川の上流は1963（昭和38）年までにほとんどが暗渠となったが、この区間は少し遅れて1970（昭和45）年に暗渠化された。現在は渋谷駅北側、MIYASHITA PARKに至る道となっている【写真左所蔵：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、写真右：編集室】



⑤ 左は1957（昭和32）年に撮影された渋谷駅前の写真。駅周辺の整備に合わせて暗渠化が進められたことから、ここは他の場所よりも早く川が姿を消した【写真左所蔵：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、写真右：編集室】



⑥ 左は1921（大正10）年に撮影された、渋谷駅付近の写真【写真左所蔵：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館】

エクステリア バーチャル施工写真集「E-Real@site」を開設。 企画から設計、施工までトータルでサポート —— 公共エクステリアの施工空間をバーチャルで体感できる

文 | 遠藤雅人
LIXIL
LIXIL Housing Technology
エクステリア事業部
エンジニアリング推進室



【図1】エクステリア バーチャル施工写真集「E-Real@site」WEBサイト <https://www.biz-lixil.com/s/e-realsite/>

2022年6月1日、LIXILビジネス情報サイトにエクステリア バーチャル施工写真集「E-Real@site」を開設しました【図1】。建築外構・土木で必要とされる公共エクステリア製品*をバーチャル映像で紹介するサイトです。コンテンツには、製品のWebカタログやCAD、BIM、画像データ、関連した他の施工事例などがリンクされ、設計検討やプレゼンテーション、施工の納まり確認などに幅広くご利用いただけます。

製品の全景を紹介するものが多く、設計検討時の情報としては「施工全体のイメージはつかめるが、詳細がわからない」「プレゼンの際に、お施主様が製品に興味をもって細部がすぐにわからず困る」というご意見がありました。他にも製品を調べるときに、商品ホームページやカタログなど、それぞれ関連情報がバラバラで探すのに時間がかかり、設計に必要なデータになかなかとり着けないという声をいただきました。

また、施工段階においては「段取り八分仕事二分」と言われるように前準備が重要になります。同じ製品であっても現場によって納め方が異なる場合があるため、施工前に取り扱う製品や施工方法について認識し、そのときの施工状況に応じた納め方などを見ておくことが望まれます。しかし、実際に現場を確認しに行くのは難しく、また図面、取付説明書、カタログでそれぞれ情報を探すのは手間がかかるため、施工上の詳細なポイントを確認できないということがアンケート調査から見えてきました。

これらのことを踏まえて、設計者や施工者の皆さまからのご意見・ご要望を解決するために、コンセプトを「リアルな現場をバーチャルで確認」とし、

企画から設計、施工や運用までトータルでサポートするバーチャル施工写真集を実現しました。エクステリア バーチャル施工写真集「E-Real@site」は、これまでの施工事例の考え方は異なる発想で制作しており「施工事例を起点」にワンストップで必要情報を入手できるサイトとしています。

使う側の目線で表現した 実用的な3D施工事例集

これまでの施工事例の紹介画像は、スチール撮影したきれいな2D画像でした。しかし紹介できる画像は少なく、見る側にとっては受動的な見え方です。それに対して「E-Real@site」は、バーチャル撮影した360°の3D映像を採用したことで、設計者、施工者、施主の皆さまがわかりやすく、能動的に使えることを追求しています。さらに商品説明、Webカタログ、CAD、BIM、画像データなど、属性情報がリンクされ詳細もすぐに入手できます【図2】。これまでとはまったく違った新しい施工事例の映像体験を提供しているのが、今回の「E-Real@site」です。

現場へ行かずに 施工事例をバーチャルで確認できる

サイトの名称は、エクステリアの“E”、現実の“Real”、現場・場所を表す“site”からなり、「エクステリアの現実の現場を見せるサイト」という意味をもたせています。

検索方法は、「建築用途から探す」「製品から探す」の2つがあります。たとえば、引戸門扉の施工事例を見た場合、外観で引戸が閉まっている状態から進んでいくと引戸が開き敷地内に入れ、内観（製品の裏側）も見る事ができます【図3】。さらに映像を進んでいくと引戸門扉の開き具合、壁との隙間、縁石なども確認できます。レール部分を見るとレール端部や水切り部といった詳細な施工ポイントもわかります。寸法が気になるときは「測定モード」で計測でき、施工ポイントを知りたいときは「ハイライト」を選択すると製品と施工のポイント映像が一覧で表示されます【図4】。このように、実際の施工現場を撮影したバーチャル映像から、形状やサイズ、詳細な納まりまで現場へ足を運ぶことなく、その場で見ているような臨場感をもって施工現場をご確認いただけます。

ユーザーに寄り添ったツールを展開していく

6月に公開した「E-Real@site」ですが、さまざまな評価をいただいています。公共エクステリア製品は、屋外に設置されるため、これまで3Dデジタルマップなどで探されている方が多かったのですが、「E-Real@site」があればその手間もなくなります。他にも「カタログよりも便利になった」「情報共有ができて進行が正確になり手戻りがなくなった」「スマホやタブレットでも対応可能なので外出先での打ち合わせにも使える」「商品知識のない新人でも簡単な操作で施工について学べる」といった声をお寄せいただきました。

LIXILではリクエストにお応えして、施工事例の掲載内容を順次拡充し、より使いやすいバーチャル施工写真集を提供していきます。

* 公共エクステリアの定義は、民間の共同住宅や生産施設などの建築物の外構製品を指しています（戸建住宅を除く）



「E-Real@site」はLIXILビジネス情報サイトの「提案ツール」からアクセス、または検索サイトで「E-Real@site」と入力すると表示されます。



【図2】「E-Real@site」の活用方法

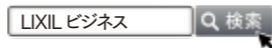


【図3】引戸門扉の施工事例。車椅子を想定した設置方法など、詳細な施工ポイントも確認できる



【図4】通路屋根の施工事例。選択した青色の情報ピンは製品情報とリンクしている

LIXILビジネス情報サイトでは、商品情報、カタログ、2次元・3次元CADデータ、BIMデータ、画像データのほか、施工事例やコラム、アフターサポートに関する情報もご覧いただけます。また会員に登録していただくことで、カタログ請求、セミナー申し込み、メールマガジンの購読、会員限定コンテンツの閲覧などのサービスもご利用いただけますので、ぜひご活用ください。



施工事例

<https://www.biz-lixil.com/case/>

LIXIL 商品をご採用いただいた、さまざまな施工事例を掲載しています。

宿泊施設、教育施設、集合住宅などの建築用途からの検索や、外装・ファサード・サッシ、エクステリア、トイレ・洗面などの空間別での検索とあわせて、竣工年や地域で絞り込むことも可能です。最新事例を定期的に追加掲載していますので、ぜひご覧ください。



三菱UFJ銀行 名古屋ビル

名古屋・栄地区の旧東海銀行本店ビル跡地に建つ、三菱UFJ銀行の中部地区の新しい拠点。外壁のテラコッタ陶板は独特の肌合いを表現

所在地 | 愛知県名古屋市中区
竣工 | 2021年7月
設計 | N3計画 三菱地所設計・日建設計・伊藤建築設計事務所設計監理共同体
施工 | 大林組・徳倉建設・名工建設・矢作建設工業特定建設工事共同企業体
LIXIL商品使用空間 | 外装壁・床タイル、内装壁・床タイル、トイレ・洗面、カーテンウォール
事例詳細URL | <https://www.biz-lixil.com/case/all/B210145/>



コートヤード・バイ・マリオット大阪本町

ビジネス・観光両面に便利な抜群のロケーションに位置するホテル。開放感のある快適な水まわり空間で、日本らしい質の高いおもてなしを提供

所在地 | 大阪府大阪市中央区
竣工 | 2019年7月
設計 | 久米設計
施工 | 奥村組
LIXIL商品使用空間 | 浴室
事例詳細URL | <https://www.biz-lixil.com/case/all/B210144/>



日本体育大学

日本体育大学の2つのキャンパス間を往復するシャトルバスのバス停。モダンな校舎とデザインを合わせ、周囲の風景ともなじむ佇まい

所在地 | 東京都世田谷区
竣工 | 2022年3月
設計 | 久米設計
施工 | 東急リニューアール
LIXIL商品使用空間 | カーポートSCをバス停に使用
事例詳細URL | <https://www.biz-lixil.com/case/exterior/B210127/>



常滑市庁舎

地域の景観や特色をデザインに活かした、災害時にも機能する3階建ての新庁舎。トイレはさまざまな来庁者が安心して利用できるよう配慮

所在地 | 愛知県常滑市
竣工 | 2021年3月
設計 | 日建設計
施工 | 鹿島建設・東海エコン・マルタク特定建設工事共同企業体
LIXIL商品使用空間 | タイル、キッチン、トイレ、カーテンウォール
事例詳細URL | <https://www.biz-lixil.com/case/all/B210124/>

「タイル建材プロダクトサーチ」リニューアルのお知らせ

タイルの商品情報を検索・閲覧できるデジタルカタログ「タイル建材プロダクトサーチ」が、機能を強化してリニューアルしました。画像を大きく表示することで、質感、面状、形状、色のバリエーションなどをわかりやすくご覧いただけます【図1】。また品名・品番、カテゴリ、使用条件などで検索ができ、迷わずに目的の情報をお探いただけます【図2】。スマートフォンでも快適に閲覧していただけますので、ぜひご活用ください（一部、ご利用には会員登録が必要です）。

<https://www.biz-lixil.com/product/tile/>



デジタルカタログ「タイル建材プロダクトサーチ」



【図1】商品紹介ページ



【図2】さまざまな切り口から検索

INAXライブミュージアム

企画展「Fashion On Tiles—あの時代、この国のおしゃれさん—」

会期 | 開催中、2023年4月11日（火）まで

装飾タイルには、幾何学模様や植物などの普遍的なモチーフに加え、時代や地域の服飾を反映した人びとの姿が描かれています。ユニフォームの起源となるヨーロッパのミリタリーウェア、流行最先端のセーラーカラーの子供服、上等なシルクで身を包むイランのユニセックスファッション、重ね着テクを効かせた漢民族衣装など、人物の服飾に目を凝らすと、タイルがある時代、ある国のファッショントレンドを伝えていることに気づくでしょう。

本展は、当館収蔵の人物文タイルから80余点を厳選し、そこに見られるさまざまな服飾を、タイルの用途や技法、さらに人物文タイルが好まれた文化的背景などに触れながら読み解きます。会場では実物タイルに加え、そこに描かれた人物が等身大となって動き出すアニメーションもご覧いただけます。世界各国、時を重ねたタイルをファッションという新たな視点から楽しみください。

上：企画展チラシ
下：会場風景（撮影：河合秀尚）



Instagram公式アカウント開設のお知らせ

これまで運用してきたフェイスブック公式アカウントに加え、2022年7月にInstagram公式アカウント (@lixil_inaxmuseums) を開設しました。

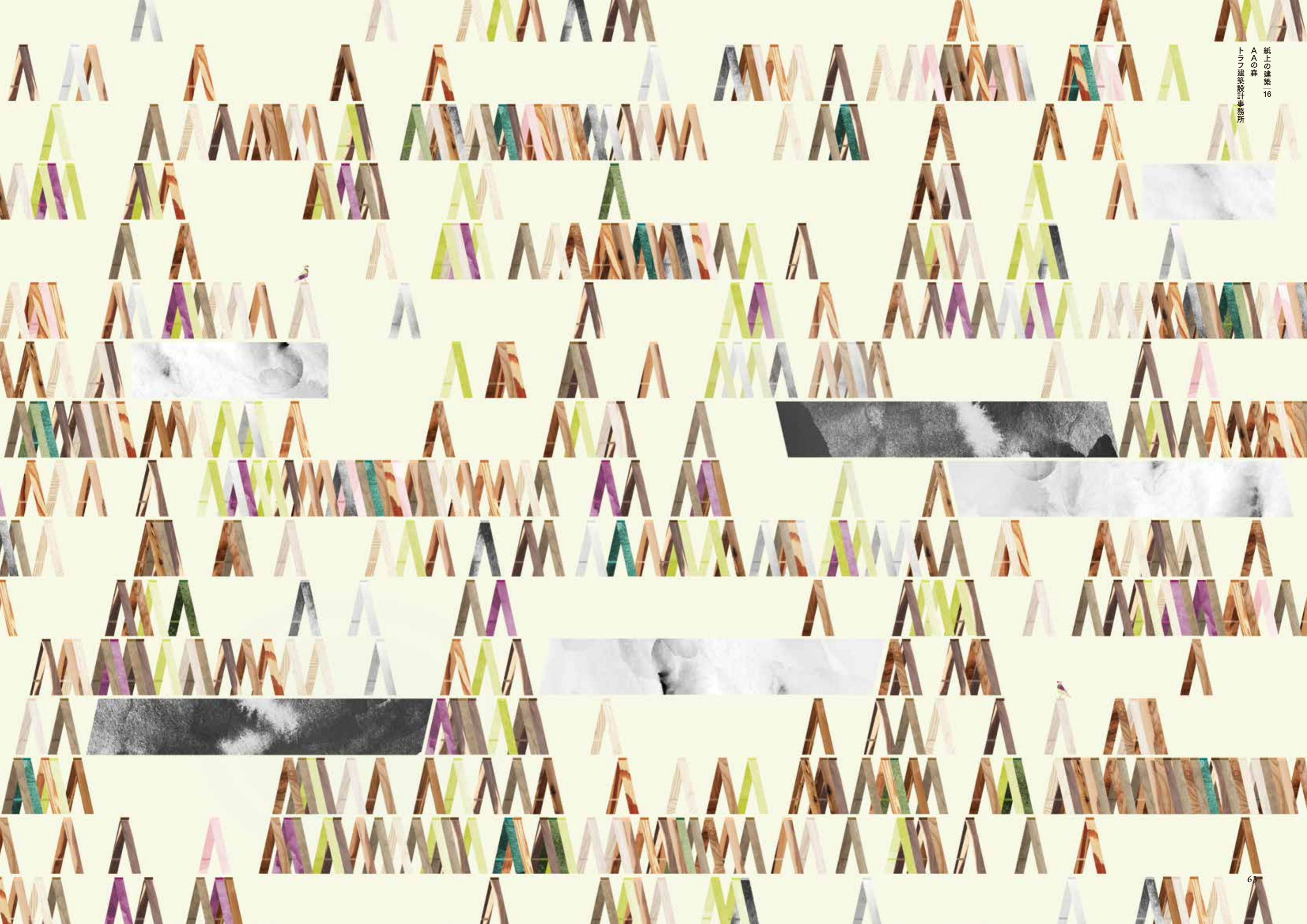
常滑の地から、タイル・テラコッタ・古便器コレクション、建築やものづくりの魅力をお届けしていきます。ちょっとワクワクする、幸せになれる情報をたくさんお伝えしていく予定です。ぜひフォローしてください。

INAXライブミュージアム
※最新情報や開館時間などの詳細はWEBサイトをご覧ください。

<https://livingculture.lixil.com/ilm/>
所在地 | 愛知県常滑市奥栄町1-130
Tel: 0569-34-8282
休館日 | 水曜日（祝日は開館）、年末年始



INAXライブミュージアム
Instagram公式アカウント
https://www.instagram.com/lixil_inaxmuseums/



すべての建築は平面を通じてつくられる——イメージを人に伝えるために、ドローイング、スケッチ、テキスト、図面などさまざまな平面表現を行うところから建築は立ち現れるもの。ここから始まる3ページで、建築家の手を通じた自身の建築観を表す平面表現を試みる。

紙上の建築 16

AAの森

トラフ建築設計事務所

トラフ建築設計事務所

鈴野浩一と亮真哉により二〇〇四年に設立。建築の設計をはじめ、インテリアデザイン、展示会の会場構成、プロダクトデザイン、空間インスタレーションやムービー制作への参加など活動は多岐にわたり、建築的な思考をベースに取り組んでいる。主な作品に、「港北の住宅」(二〇〇七)、「空気の器」(二〇〇九)、「TOKYOBIKE TOKYO」(二〇一一)など。二〇一六年「トラフ建築設計事務所 インサイド・アウト」(TOTO出版)を刊行。

石巻工房のためにデザインしたAAスツールは26×86×3050mmの規格寸法材を無駄なく使用したシンプルなスツール。横から見ると「A」にも見えるスツールは、二脚を重ね合わせて一体としている。いくつかを重ね合わせることも、ばらして使うこともでき、想像次第でさまざまな使い方ができる。

開発されて10年、近年は「メイド・イン・ローカル」プロジェクトを通じて世界に広がる。地元の人々とのかわりを通じて協業先特有の材料を活用した製品

が、それぞれのコラボレーション先で製作されるようになった。

さまざまな国の木材でつくられたスツールは、多種多様な背景と表情をもつ。そうして集まったAAスツールは、平原に広がる森のようでもあり、巨木がそびえる森のようでもある。

